《2022年発行小説集・R18》サンプル約文字

いば神円（しんえん）

販売9作品+オマケ　約１８００Ｐ　約44万文字。イラスト無し。
Ｒ内容は全体的にマニアック寄り。ハート喘ぎ、雄っぱい母乳、ふたなり女子受け、百足の妖怪、モブレイプ、男オナニー、アナル、触手、カニバ15Ｇ、生理、複数など有。

収録
(1)ほぐされ、かどわかされて
(2)百足ノ疑似夫婦
(3)君は愛しの百日紅
《君は愛しの百日紅》、《番外編(イチャイチャ)》
(4)妖怪ばぶみ
《妖怪ばむみ》、《ＩＦ・スケベな夢気分》、オマケ《ＩＦ・スケベな夢気分

2》

(5)VR妊娠

(6)仮想空間えっち

(6)魔法少女Hの憂鬱

(8)ゾンビさんの甘い死臭

(9)オマケ　僕の可愛いリエちゃん

性の始まりの話。ショート。

(10)オマケ　きのこ

謎キノコで一時的に、フタナリになっちゃった女の子が受けの両片想いな話。

主人公・京(きょう)♂

ヒロイン・豆子(とうこ)♀

(11)漂流宇宙亀情事

《前編》、《後編》、《後日談》カニバなR15G要素あり

よろしくお願いいたします。

主人公：奥さん
本人は自分は平凡だと思っているが美人でナイスバディ。

お相手1：康太（こうた）
髪オレンジブラウン、瞳は茶色。耳にピアスをしている青年。チャラい。筋肉質でイケメン。しかし本質は鬼の妖怪。人間の登山客の死体から人の肩書を貰って嫁探しをしている。温泉街には他にも妖怪が存在している。人での職種はマッサージ師。温泉街で中々の人気。
一人称、オレ。

お相手2：彰（あきら）
黒髪、黒瞳。爽やかな青年。真面目そうな雰囲気だが同じく本質は鬼の妖怪。康太と同じく登山客の死体から情報を貰い温泉街でマッサージ師をしながら嫁

を探している。小鬼の頃から人間の雌を番にするのが夢。康太とは兄弟。他にも兄弟は多い。嫁を見つけたら狭間に隠して肩書は兄弟に譲る予定。
一人称、僕。

その他：モブ
インポで子作りプレッシャーに耐えきれず妻を責めて逃げた旦那。
主人公の妹。康太や彰達、鬼の祖母。

《ほぐされ、かどわかされて》

温泉街の中にある一つの宿。そこの宿に泊まりにやってきた。最近は口数が

少なくなってしまった旦那も湯に浸かって豪華な食事を食べて気分が上がったのか他愛もない会話が弾み嬉しくなった。食べ終わった食事が片されていき、どきどきしながら旦那の手に、そっと触れる。ビクッと彼の肩が震え。

「……はぁ」

小さく溜息を吐かれた。

「……あんま、そーいう気分じゃないんだけど」

「あ……えっと……私、頑張るから……だから……」

「……」

そっと手を引っ張って寝室へ向かう。食事の間に敷かれた布団は一つ。それを見た彼の顔が引きつるのを感じたが唾を飲み込み浴衣の帯を外したのだった。

＊＊＊

結婚してから三年目。そろそろ子供をと旦那の両親に急かされ旅行をプレゼントされた。しかし夫はプレッシャーからか子作りという行為でモノが立ちにくくなり今日も中折れし『耐えきれない！』と言い残して宿の外へと脱走した。

「……うう」

へコむ。

「……やっぱり私から変わらないと」

ゴクッと唾を飲み込み旅行前に妹に渡されたバイブを鞄奥から取り出す。形は膣内側のが親指二本分の太さで長さは手の平ぐらい。説明では、ちょっと内向きに丸まっている部分が快感を起こしやすい場所を刺激する。そして外側のは陰核に触れて振動する代物だ。

「こ、これを入れて……彼に見せれば……」

勇気を出して妹にセックスの相談をしプレゼントしてくれたモノ。充電満タ

ンで確か一時間は保つと言っていた。

「濡れてはいるから……」

夫は入れるまでは頑張ってくれたが直ぐに固さを無くしてしまい、より自信を失ってしまって悲しい。今は外に幾つもあった居酒屋にでも行って呑んでいるんじゃないだろうか。

「……連絡だけ」

メールで『風邪ひかないでね』と送り乱れた浴衣姿の自分を見下げた。勝負下着は中途半端に脱げ涎と愛液と夫の我慢汁で濡れている。脚を開き指で陰唇を、ねっとっと開いて試しにバイブを入れてみた。

ぬぷぷぷ……

「……ん♡　えーっとスイッチは……」

このバイブは何段階か変わるスイッチらしい。妹にされた説明を思い出しながら押してみる。

ブブブブブ……♡

「ひぅぅうっ♡　ぁ♡　これ……凄いかも……♡」

思わず自分の乳首を触りながら自然な振動を味わう。

「もっ♡　んはっ♡」

コンコン。

「すみませーん」

「おまたせしました！」

「へっ!?」

宿の廊下側から声がする。慌ててブラを胸元に当ててバイブを止めようとするが初心者な為にボタンが直ぐには分からない。落ち着いている瞬間ならば止めれたが振動が変わっただけだった。

「ひぅん……♡」

びくっ♡　びくっ♡

驚きと緊張の刺激に軽くエクスタシーを感じてしまう。

「鈴木さん？」

「ご予約のマッサージに来ました～！」

――……予約？　予約？

多分、間違いではないだろうか。バイブを抜いて置こうと思ったが適当に置いて見られてしまえば恥ずかしすぎる。一瞬、鞄に入れなおせばと思ったが濡れたモノを入れたくはない。バイブの切り方が分からず仕方ないので一番低振動辺りにしショーツを慌てて上にして浴衣を直しながら寝室の襖を開け、ヨタヨタと向かい廊下側の襖も開けた。

「あ、今晩は」

「ご予約の鈴木様ご夫婦でお間違えないでしょうか」

「……ん、え、えっと……？　す、鈴木ですが何か予約した覚えは……ん……」

――……そっか、タオルに巻いて隠せば良かったんだわ……！

見目の良い青年二人が持っているマッサージ用の道具類を見てハッとするが

後の祭りだ。とりあえず膣内で振動し続け陰核を刺激するバイブを太股を閉め音を出来るだけ漏らさないよう我慢するしかない。

「えっ！　あってるよなー？」

「宿泊プランにオプションで入れられているかと……支払い済みなので……」

私の言葉に二人は不思議そうな顔をしパット内の画面をスライドして呟きあう。

「あ、備考に、ご両親からのサプライズと書いてありますね」

「ふふ。素敵な、ご両親ですね」

「……ありがとうございます」

旦那の両親が緊張解しに食事のコースの後に入れてくれていたらしい。食事後に直ぐに始めて脱走された現在、夫はいない。もうちょっと会話でもして後にすれば良かった。

「お、夫は今……呑みに行ってしまって……」

「えっ！　ぁあ～勿体ない～！」
「今夜の予約になってますので、ご連絡出来たりは……」
「そ、そうですね……」
「オレら一応、此処らの温泉街じゃ有名なマッサージ師なんですよ！　是非、受けてください！」
髪はオレンジブラウンで瞳は茶色。耳にピアスをしている青年が白い歯を見せて人懐っこく笑って言う。
「えーっと……スマフォを取ってきます」
「はーい♡　じゃあ準備してますね！」
「康太、ずかずか行くなって寝室使っても？」
「えっ、あ、はい……っ」
明るい雰囲気のコウタは、どうやら承諾されたと思い真っ直ぐに寝室へ向かってしまう。先程まで情事があった部屋だ。臭いは大丈夫だろうか。

「旦那さん、良いっすよね～奥さんみたいな美人、お嫁さんにもらえて羨ましい～！」
「こら、康太。すみません、こいつ口が軽くて……」
黒髪、黒眼の青年が申し訳なさそうに頭を下げてくる。
「あ、ほ、褒められて嬉しいです……ん……っ」
内心、自分の状況を、どうすれば良いか混乱しながら電話を鳴らす。なかなか出ない。
「けーくん出て……」
「旦那さんの、こと、そー呼ぶんだ……オレもコーくん♡　とか、お嫁さんに呼ばれてえ……」
「しっ、電話中なんだから余計な事言うな」
「彰はアーくん♡　って、呼ばれるんだぜー♡」
べしっと背中を叩く音がした。どちらも筋肉質で体格が良く、良い音だった。

『……』
「あ、繋がった！　け、けーくん、あのね」
『……俺、今日帰らないから』
「え？　か、帰らない？　えっ、どうしたの？」
『昔の同級生に会ったから一緒に呑んで泊めてもらう』
「な、なんで……」
『どうせ……』
「けーくん？」
『インポ野郎って呆れてんだろ！』
「……っ、よ、酔ってるの、けーくん」
『こんな旅行なんて用意して有給無駄に使わせられて癒しでもなんでもないし、本当疲れる』

「……」

『帰りたきゃ好きに帰って俺は有給、好きに使って帰るから』

『慶一、何々電話～？』

女性の声。

ぷちッ。

通話が切れて茫然とする。

――……え、え……？　え？

悩ませてしまっているとは薄々思ってはいたが、こんなに怒らせるとは思いもしなかった。後、同級生って女の人なのか。

「は？　旦那屑じゃん」
「ばっ、すみません……こいつ本当……」
後ろから片腕を回して彰は康太の口を塞いでいる。ガッチリとした太い筋肉質な腕が食い込んで本気度が高い。どうやら電話の内容は丸聞こえだったようだ。
「……いえ、その、私が怒らせてしまって……えっと折角なんですが今日は」
「だったら、オレら二人でマッサージしますよ！　むしろ、しなきゃ損ですよ！　オレらみたいなイケメンで凄腕、中々いないっすから」
康太は彰の腕を引きはがし笑顔で促してくる。
「確かに……二倍解せますし、どうですか？　まあ、こいつがウザければ僕だけしますんで……」
「は？　ずり～！　オレをハブるなよな！」
断ろうとすれば全力で善意を見せられて泣きそうになった。専業主婦になっ

てから人に優しくされたり褒められる機会は減って旅行は新婚旅行ぶりで、セックスへの期待は、もちろんあったけど久々にデートが出来て嬉しかったのは私だけで。

「……」

「よし、ホットタオルしますか！」

「リラックス効果のある香りを垂らしたものなんで気持ち良いですよ」

「さあ横になって」

「へ、ぁ……っ」

掛け布団を取った敷き布団上にタオルを広げた場所が用意されており、枕の位置に頭が来るよう両者から優しく引っ張られ。自然と横にさせられて仰向けで寝転がる。そうなってバイブの感覚が変わり忘れていた振動がやってきた。

「ふぁぁ……♡」

我慢できず漏れた声はホットタオルが目元にかけられた時なので多分、気持

ち良さの理由は、バレていない筈だ。ホットタオルからは何かの花の上品な香りがして、そこは普通に気持ち良い。
「あはは♡　可愛いー声♡　は～こんな美人でナイスバディな奥さんいたら毎日、巣に隠ってウキウキハッスルすんのになあ～」
　足裏を揉みながら康太が言う。
「康太、口を縫われたいのか、お前」
「だってさ～山から下りてマッサージ師になっても番が全然見つかんねーし、オレらだったらって思うだろ～」
「思っても一旦、音にしない事を覚えろよ」
　山。田舎、出身という意味だろうか。
「頭、失礼しますね」
「……ふぅ♡　ぁ、気持ち良い……♡」
「ふふ。頭皮にもツボってあるんですよ。ご存知でした？」

「ん……♡　初めて知りました……♡」

バイブさえ入れていなければ素直に、マッサージを楽しめたのに状況に緊張して気持ち良くても、リラックスは出来ない。足と頭皮が終わったら終了にしてもらわなければ何時、バイブがバレるか分からないのだ。

――……うう、ただでさえ、こんな格好良い人前にしたら緊張するのに……バイブなんて使うんじゃなかった……私の馬鹿……こんなんだから、けーくんに嫌われて……

「……んぅ♡」

頭皮マッサージ。普段、揉む機会がないからか、とてつもなく気持ち良い。バイブが無ければ熟睡していた可能性すらある。

すり……すり……すり……

「ふぁ♡」

頭皮マッサージで指が耳を掠める為に、ちょっと変な感じがしてしまう。

「普段、マッサージの、ご経験は、ありますか？」

「ん……特には……妹とじゃれ合って、ちょっと揉み合う事したぐらい……ふぅ……♡」

「じゃあ指圧のみですかね？　どうですか、オイルマッサージも出来ますが」

「オイルマッサージ……？」

「専用のオイルを使うのですが……身体が解れやすく温まり肌質も良くなりますよ……」

「ん……♡　そ、そうなんですね……でも今日は……♡」

「足ツボ押すにはオイルあった方が良いんで使うね！」

人肌の温かさを感じるオイルが足に塗りつけられ脚がビクッと上がる。それを大きく硬い手が包み込み慣れた様子で指圧が続けられる。

「あ……っ♡」

確かにオイルがあると無いとでは指圧の付加が違うし、ちょっと痛気持ち良い。

「……頭皮マッサージは指圧のみですが、この後に手の平でしますね」

「……えっと♡　んっ♡」

耳裏から後頭部へ親指が滑り首筋を指圧され気持ち良い。流石プロだと感じた。

「……は～やばっ♡　特別なオイル使いたくなってきた」

「康太」

「彰も、そうな癖に」

「……はぁ」

何やら小声でたしなめ合っている。

「はい、少しずつ上がりますよ～」

康太が嬉し気に私の足裏から滑り足首を指圧しふくらはぎを押しながら滑った。私は浴衣なのを思い出し慌てて足側の襟を両手で握り締める。

「どうしました？」

「あ……えっと……ちょっと、は、恥ずかしくて……」

ホットタオルで目元が隠れている為に状況が把握しきれないが片脚が軽く上がった状態なので中心部がバレやすくなっているのではないか。そう焦りが生まれた。

「へぇ……こんなに綺麗な脚してるのに？」

何か滑かわしい声色。康太の声調が変わると急に不思議な感覚が身体に走り腰が小さく震えた。

「っ……っつ♡」

軽く高みがきてしまった。声は我慢したが、どっと汗が滲む。
「は～……♡　マジかぁ……♡　ねえ、奥さん……」
「へぁ♡　は、はい……？　きゃう！」
康太が近付く気配がして太股とお尻の中間部分まで一気に手が滑り緊張で身が震えた。
「くは……♡　良いなあ……羨ましいなあ……オレも奥さんみたいな番が欲しいんっすよねえ……」
「つ、つがい？　です、か……ん……♡」
「奥さん……ほら、手を離して……次は僕がオイルマッサージをしますから……ね？」
「えっと……も、わ、私……ふぁ♡」
断ろうとすれば軽くお腹を押された。おへそ辺りだろうか、くい、くいっと手を当てられて浴衣越しに温かな体温を感じる。

「……ぁ♡　お、お腹は……♡」

彰が触れる手を片手で取ろうとするが力が入らない。

「痛いですか？　もし痛みを感じたら肝臓が弱っている可能性があります。マッサージで一部は改善できますので……」

――……痛いんじゃなくて……！

高みに上ったばかりなのに、そこを、そんな風に押されると中に入っているバイブを締め付けて陰核に触れる部分も含め腰が自ら浮いてしまう。

「ひっ♡　ふっ♡　まって……♡　ぁ、あ……♡」

くいっ♡　ぐっ♡　ぐっ♡

びくんっと身が跳ねて、その動きに合わせて康太の両手が動き浴衣の内側、ショーツまで滑り込んだ。
「ふはっ♡　イっちゃったの？」
「……へ？　う、う？」
ホットタオルがズレて片目で、ぼんやりと目を向ける。水気で滲んだ視界は見にくかったが青年二人の妙な近さを感じ、それと共に熱気に気圧された。
「……ひゅ」
自分の喉から声なのか息なのかよくわからない音が漏れる中、康太が指先に、ひっかけたショーツを、ぐいぐい引っ張って弄ぶ。
「あっ♡　やらっ♡」
「ねえ？　何で玩具付けてんの？　旦那とのプレイ？　インポの為に頑張っちゃった？　それとも……オレらを誘う為？」
「ひ……っ」

べしんっ！

「あてっ」

「怯えさせて、どうすんだ。加減しろよ」

「えっ、怖がらせちゃった？　あ～ごめん、ごめんねー！　つい興奮しちゃってさ～♡」

彰に頭を叩かれた康太がギラギラとした目を、ぱっと優しく変えて、にこにこと笑顔を見せて謝罪する。

「……？」

「すみませんね奥さん。さ、オイルマッサージを続けましょうか」

「え……んっ♡」

私の両手を浴衣から引きはがすと彰は手慣れた様子でオイルの付いた手を滑

らせ、まるで恋人繋ぎかのように両手を揉みだす。

――……ば、バレたのに？　あれ？　続けるの……？

意味が分からず唖然とするが彰は爽やかな笑みを浮かべて会話を続ける。

「手の平は足の裏と同じように改善する為のツボが多くて……良ければ普段から自身でも出来るツボの場所を教えますね」

「へ、はい……」

「この親指と人差し指の間、骨を感じる部分より内側部分、ここ、ここをこうやって押したり回したりするだけでも頭痛軽減になりますんで是非、試してみてください」

「は、はい」

「頭痛は多い症状ですからね。眼精疲労の場合は直接、目の周りを自身の手の

平で温めたり軽く押してみると気持ち良いですよ」
「あ、へー？　目に当たらない部分ですか？」
「そうでね泣き袋や眉上、辺りで……直接眼球を押すのは駄目ですね」
「なるほど……」
余りにも彰が普通に進めてくるのでバイブを気にしなくても良いのではという不思議な感覚に陥った。だからだろうか、まだ振動するバイブを抜き終わりにするという思考が抜け落ちたのは。
「あ～あちー……脱ごっ」
私の太股上に跨っている康太は徐に白い作務衣の上着を脱ぎだす。彰から視線がズレ思わず康太を見れば、ムキムキな出来上がっている身体が露わになった。絶句すれば笑顔の康太にウインクされる。
「奥さんも暑いよね。帯外しまーす♡」
「あ、だ、め……ひっ♡」

浴衣の下は勝負下着とバイブのみ。
「なんか合ってないと思ってたらホック外れてんね……えろ……」
浴衣がはだけた身体を、まじまじと見られ羞恥で身体の熱が、ぐんっと上がる。
「耳、朱いですね……」
「んっ♡　え、ぁ、アキラさんっ♡」
私を、ぐっと後ろから押し上げると自身の胸元に置き、囁きながら軽く耳の淵を噛まれた。
「あ、あのっ♡　きゃっ」
その状態で握っている手を組ませブラジャーが簡単に外れて乳房がむき出しになる。
「やわ……っ、んんっ、こっちのツボも押して良いですか」
彰が腕に乗った乳房を見つめながら、そんな事を言ってきた。

「こんなに大きいんですもんね。普段から凝るでしょう？」
「えっ、ぁひっ♡」
前側から康太が片手を伸ばし乳首を指平で押し、くにくにと弄ぶ。
「乳首、吸いごたえありそう……♡　あ～もう、ちんちんスゲーイライラする……はぁ♡　良い？　こんな、バレバレな玩具して誘ってないって、ありえないし♡」

ぱくっ♡　じゅうううううう♡

「きゃんっ♡　ぁ、あっ♡」
康太が私が言葉を理解する前に乳房を口に入れ大きく吸い込む。
「ったく、ここは、あくまでマッサージプレイで行くべきだろうに……」
彰が軽く悪態を吐き。驚いて顔を横に向ければ、そのまま唇を塞がれた。慌

てて止める言葉を出そうとするが開いた口に舌が入り込み。

ちゅう♡　じゅる♡　じゅるる♡

「むんっ♡　んんっ♡」

彰は私の手を解くと片手を開いている乳房に当て片手を、またおへそに置いて押してくる。

「んぐっ♡　んうう♡」

何故だろう。この優しくお腹を押される行動をされると腰が自然と浮いてしまう。

ちゅう♡　ちゅう♡　じゅう♡　じゅう♡　ちゅぱ……♡

「はぁ……♡　乳房も腹部も、どうですか？　指圧、気持ち良いですか……？」
舌が抜け唾液が彰との間で糸をひいて垂れ落ちていく。
「は……っ♡　ぁ、あの♡　こ、これいじょ、ぅ♡　だめ……♡　また……っ♡」
「ふふ……♡　気持ち良い時は声を沢山出して素直に気持ち良いって言うと気分も晴れやかに身体も、より快感を感じれますよ……♡」
「えっ♡　う、ぅ♡　あひっ♡」
「んあ～♡　奥さんの濡れバイブ、ちんちんに当たってヤベえ♡」
康太が私の両膝を腕に抱えて下から腰を押し付けてくる。そうすると振動を続けるバイブが押しつけられ奥と陰核への刺激が強まった。
「あっ♡　しょれっ♡　だっ♡　めっ♡」
「奥さん、イく時はイくって言ってくださいね」
「うっ♡　うぅうっ♡」

びくびくびくっ♡

腰が盛大に震え内側から液体が噴き出すのを感じた。

「あはは♡　奥さんので、オレのズボン、びしょびしょじゃん♡」

「……ぁ♡　んぅ♡　やぁ♡　も、ぬいへぇ♡」

もう、バイブを抜いてほしい。

「ふふ……♡　イけたのか分からないので、まだ続けますね。康太」

「おう！」

彰は私を康太から受け取り後ろから膝を抱え。持ち上げた状態で彼は膝立ちをした。

「はぇ？　ぁ、あ♡　あ♡　あんっ♡」

ぬぷ♡　ぬぷ♡　ぬぷ♡

康太がショーツの上からバイブを掴み軽く出し入れをし、その快感に震える手を伸ばし止めようとするが。

ブイーンッ、ブブブブ……ブインブイン♡

「ひぅん♡　あめっ♡　あっ♡　あっ♡」

康太は、スイッチに触れたらしい。振動の緩やかな動きが変わり腰が浮き動く。

「おわ～♡　すげっ♡　人間って何で、こんな、えろい玩具思い浮かぶわけ？天才じゃん♡」

ビリッ。

ショーツが千切られる音。

「ほら、もっと出して♡　ほら♡　ほら♡」

「やあ♡　ひぃ♡　あへ♡　あ、あっ♡」

じゅぽ♡　じゅぽ、じゅぽ♡　じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ♡

バイブが激しく出し入れされ、その度にスイッチに手が触れて予想できない振動が快楽を押し上げる。

「ひぃん♡　も、とめ、とめへ♡　やぁ♡　でちゃ、でちゃう♡」

ビクッと身が跳ねて、エクスタシーが身体を支配する。透明な液が康太に飛び散るが、彼は手の動きを止めない。

「やあぁ♡　も、やら♡　やらのっ♡」
ぴりゅ、ぴりゅとバイブを出し入れされる度に愛液が飛び出る。
「駄目ですよ。気持ち良い時は気持ち良いって、イく時はイくって、ちゃんと言わなきゃ……僕らは教えてもらえないと分からないんですから、そうなったら、ずーっとコレを続ける事になる……」
後ろから彰が硬いモノをお尻に押しつけながら諭してきて私は叫んだ。
「うあっ♡　いいの♡　いくへ♡　イく♡　イくの♡　イくぁ♡　もぁ♡」
ガクガクと腰が揺れ潮以外の黄色い液体が飛び出ていく。
ぷしゅっ！　ぷしゅっ！　じょろ……じょろろろろ……♡
「あー……♡♡♡」
顎が上向き涙や涎を垂らしながら焦点の合わない視線が天井を映す。

「おしっこ～♡」
「ふふ♡　ちゃんと言えて偉い偉い♡」
頬に優しく口付けされて私は瞼の重さを感じ世界が暗転していく。
「あ、あちゃ～寝ちゃうの？　オレ、種付けしてーのに……」
声が遠くなっていく。私は、そのまま眠りについたのだった。

冬蜜(とうみつ)ともこ♀

薄茶交じりの黒髪、淡い茶色の瞳、毒親から逃げた少々世間知らずな娘さん。不憫。

一人称・私

百王　無(ひゃくおう　むう)♂

濡れた黒髪、黒い瞳の中に紅が光る。百足の妖怪。人前だと優し気な細目の青年。なまり言葉、和服。大将決めの為に勝ち残り周りがいなくなって最近ちょっと寂しい。妖怪なので人とは倫理観が違う。ちんは二本。

一人称・オレ

《百足ノ疑似夫婦》

八百万文房具店の裏側に存在する支配人の家は昔ながらの和風の一軒家だ。大きいが、ちょっと古めかしい雰囲気が漂うそこに私は住まわせてもらっている。住み込み兼で出来る仕事を探した結果、この文房具店を見つけた。ここに就職すれば社員になれる上に住み込み可。誇れる履歴がない私には無理だろうと思いつつ試しに応募してみたら合格。私はその奇跡に大いに感謝した。

私の高校履歴は四年通いの定時制。家にお金が無い為、母子家庭なら学費は免除される。定時制に通いバイトをして、その日をやりくりして、ギャンブル依存症の母は金使いの荒い人で毎日なんとか作った通帳を奪われないかハラハラしながら生きていた。

卒業と同時に母と離れ住み込みで働けるなら正直どこでも良いと思い、その中でも一番の好条件の案に僅かな希望だけを乗せて託したが。採用通知を受け

取った時は『騙されてるのでは』っと、ちょっと不安になりもした。
まあ、結局の所『上手い話には裏がある』は実際、当たっていたわけだけれど。
「はーこれが噂の嫁さんの手料理なーオレ感動」
「……お嫁さんではないですが気に入ってもらえたようで、なによりです」
否定の言葉が聴こえたのか聴こえてないのか、うんうんと少し濡れたような黒髪を揺らして青年ほどの風貌の男は頷く。顔は笑顔だ。怖い。
「あーほんまよかったわー。君が倒れて、まともにオレと会話してくれんかった時は最初の決まりの契約破棄するんやないかって思ってヤキモキしたんやで」
「……そ、そうなんですか」
その言葉を聞いて身の内から血の気が引く。けれど、我慢しなければいけない。ここで逃げてはいけない。
母に私が彼女の元から逃げるとバレて取られてしまった通帳の代わりに給金

を前払いで一部手渡しで貰ったのだ。母に見つからない様に隠し持っていた金銭は移動代でギリギリで放置したって文句は無いのに彼は私から話を聞き出し快く出してくれたのだ。普通、そんな良心的な人はいない。破格の場所、破格の人格者。ここは絶対手放してはいけない。裏がどんだけおぞましかろうとも。せめて、一年。一年は働いて基盤を調えなければ。

「はー……オレの感は鋭いからな、流石オレや」

「……」

私の作った味噌汁を飲みながら彼は頷く。人格者は、ちょっと自信家な部分があるが上に立つ者。そんな部分があったっていいだろう。むしろ、だからこそ上に立てるのではないか。

「白飯に卵焼きーカマボコの刺身風、漬物は店で？」

「最近は直ぐに作れる漬物用の液体が売ってるので、それで漬けました」

「ほなら、全部手作りやな」

「……はい」
「ええね」
ニコニコしながら腰を上げ畳み上を滑るようにして私に近づいてくる支配人。私の身は自然と震えだす。
「よし」
支配人は笑顔で手の平をポンと私の頭上に乗せると優し気に撫でてきた。怖い。
「これで、君を罰するのはせんとこ」
うんうんと頷く支配人。支配人が優しそうな黒い瞳を揺らめかせ笑っている。一瞬、瞳の奥が紅く光った気がした。
「まあ、毎回全部が全部、手作りやなくても、ええんや。でも、まーできんだけ家庭の味が欲しいんよオレは」
「……な、なんで、ですか」

思わず搾りでた言葉に支配人は眉を上げて大人が子供に簡単な説明をするような雰囲気で語りだす。
「皆、食ってもうたしなあ」
「……」
「オレが、ここらの妖怪の大将になるには、それが一番手っ取り早かったんや」
「……」
「オレ以外誰もおらんようになったら一番やろ。あー蠱毒って知っとる？　あれと似た感じ」
早朝の明かりに照らされる彼の笑顔は綺麗だ。綺麗で発言している言葉と何も合わない。優し気で優し気で。何を。
「でも、他の同期の雄共が所帯持ちになると羨ましくてなーほなら、オレも擬似体験したいなって」
「……うぐ」

吐きそうになって口元を自分の手で押さえる。
「あれ、吐くん？」
顔を傾けて身を近づける彼の瞳は澄んでいて、朝日によく似合う。
「あーん」
「……ひっ」
彼の言動は意味が分からなかったが私は嫌な予感がして後ずさった。
「あれ？」
口を大きく開いて不思議そうな顔をする彼を見て背筋に寒気が走る。
「……あ、あの、す、すみません……お、お見苦しい所を……」
「ええよ、吐きたくなったら言うてなーほな、飯に戻るか」
「……あ、あの」
「ん？」
自分の席に戻り箸を持つ彼を恐る恐る見ながら断りを入れた。

「しょ、食欲がなくて……」
「あー風邪？　人間は弱いもんなーほなら、今日は休んどく？」
「い、いえ、仕事は出ます」
「無理せんでも、ええんやで」
「い、いえ……その為に住み込みで働いていますし……」
私がゆるゆると顔を左右に振って言えば。
「……ん？　や、違うよ」
私は何を言えば良いか分からず無言で彼を見上げる。
「オレの為やで」
「……え？」
「ほんま、ハズレやなくてよかったわー」
ニコニコしながらご飯を食べる彼。
「食う選択せんでほんまえかった、えかった。ちょっとぐらい身内いのうなっ

てからに比べたら楽な数字やもんな。小銭やな」

*

蛇に睨まれた蛙という言葉がある。コレと出会った瞬間の私は正に、そうだった。世界の音が静かになり全ての集中が目の前の存在へと向けられる。

ぞりぞり、ぞりぞり。

床を身を動かして滑る音。逃げなくてはと頭の隅で警報が鳴り響くのに目の前の音ばかりがチラついて身は動かず視線は固まる。

ひゅっ、ひゅっ、ひゅーっ。

喉奥から悲鳴代わりの空気が漏れ出た。金縛りの、どうしよも無さと似ているだろうか。腰が抜けた腰下の身は鉛のようだ。畳に触れ合っている尻の神経も鈍り動かない肉の塊は邪魔でしかなく。固い甲羅と連なるおぞましい姿が首をもたげるように近づく。鋭い沢山の爪と、あれに噛まれたら、この身は朽ちそうな牙が液体を滲ませて私の顔に滴った。ビクッと身体が跳ねた。物理的な感触が脳に刺激を与えたらしい。

「……ひぃ、ぃ、ぃ」

人生で、こんな声を出した事はあっただろうか。悲鳴を上げたいが上手く上げれず怯えと恐怖が、ぐちゃぐちゃに混ざり合い畳に背を倒して少しでも逃げようと腕が身を上側へと引きずる。

しかし。

キュー……カチカチカチ。

目の前の巨大な百足の怪物から鳴き声のようなモノが聞こえ鋭い歯を威嚇のように鳴らされると身が止まった。そのまま力が抜けて後頭部が畳に触れる。動く気力を失った。死ぬのだろうと思った。

これ以上の恐怖は肉を蝕まれて絶命する事だろうか。しかし予想が出来た今、何故か冷静に見上げれるようになった。全ての諦めが私を、そうさしたのだろう。ぼんやりと見つめていれば、ミチミチギチギチと音が鳴った。瞼が動く。

ぱちり、ぱちり。

瞼が開閉する度に何故か目の前の怪物は姿を変えた。赤黒い甲羅に黒い毛が生え始め大きく開いた鋭利な牙を包む口の形が変わっていく。連なる赤黒い甲羅の身の方も鋭い爪が白い骨のようになり徐々に徐々に肉が見え始める。

驚愕に目を見開いて見つめた。血を垂らさない内臓が形成され肉が覆い血管がミミズ状にはって青白い皮膚が、ぽつぽつと膜を生んでいく。気付けば耳まで裂けた口から、あの牙が出ているだけの成人男性の裸体へと変わり下だけ見れば綺麗なものに感じた。

「……」

しかし人とは違うのだろう。ぶら下がってみえる男性器は二本あり数が違う。そこが変わらないのを見つめていればモノが、ゆるゆると立ち上がり始め恥ずかしそうな声が聞こえた。

「やめてやぁ。あんま見られると恥ずかしいやん……」

上を見れば裂けていた口は普通の大きさになり牙はあるが縮み歯が鋭いギザ

ギザな人として見える。
「初めましてオレは君の旦那さんになる百王（ひゃくおう）無（むう）むっちゃんとかむーさんとか何か良い感じに呼んでなあ。オレは、あなた♡　より、名前派なの」
「……ぅ」
「ん？」
「……うそ」
「なにがぁ？」
信じられないが、あの怪物が人の姿になり何故だか命は失わなかったが意味不明な事を言っている。頭がついていかない。瞳から涙が滲みボロリと溢れた。地獄から逃げてくれれば新たな地獄と出会ってしまったと、そう私は感じ涙が止まらなくなった。
「おー人間の涙じゃーもらっとこっ」

百王はギザギザ歯の口を開けると舌を伸ばして私の頬を舐めた。べろり、べちょりと明らかに長すぎる舌が皮膚に触れ。生温かさを感じながら自分の頭部が反動で揺れ動く。肘から指先ぐらいの長さの舌に眩暈がする。人に似てはいるが明らかに違う。

「新鮮な味がするなあ」

そう嬉しそうに呟いて舌は、ぬめぬめと服の上から下半身へと流れて百王は感覚を失っているソコに舌平を合わせると、くき、くきっと人らしくない高めの笑い声を出した。

「畳、干さないかんかなあ……」

舌が上着とズボンの境目に入り込み、その瞬間になって感覚が甦ってくる。ヘソを戯れに弄った百王の長い舌はズボンと皮膚の隙間で蛇の前進のように肌を伝い大事な部分に入り込んだ。

「……っ、ひぁ」

「ここも新鮮やねぇ」

笑いながら下着の内側に入れ込んだ舌を動かす百王。割れ目の深くに張り付いて上下に、ぬるぬると動いては、どうやら腰を抜かしていた時に漏らしていたらしい液体を舐め取っているようだ。服をたくし上げられズボンのベルトを外されジッパーを下げられて背中や太股や尻や、その割れ目の内側まで舐められた頃には、もう私の許容範囲を遥かに通り過ぎ。意味の分からなさに熱を出した脳は意識を遮断し私は夢の世界へと跳んでいたのだった。

佐藤　優果（さとう　ゆうか）♀
黒髪黒目のガリガリな娘。服装も古めかしく臭くはないが身体も、どこか薄汚い。なまり言葉。毒親によって悲惨な状況。毒親に子を孕まされ命を絶とうとする。
一人称・アタシ

サルノ♂
橙含む明るい茶髪、薄茶色の瞳、興奮すると紅くなる。なまり言葉。住処は特に決まってはいない。求められている役職は存在するが普段は、のらりくらりと風情を楽しみ家宝の酒壺で酒を飲んで過ごしている。優果を見つけると子猿と呼んでからかうのが好き。妖怪なので人と倫理観が違う。
一人称・儂

★レイプ
★アナル
★妊娠
★モブ姦(ド屑によってガッツリ辛め)
★復讐
★純愛
★猿の妖怪
★倫理観の欠如
★サルノの時からハート喘ぎ
★最終的にイチャラブ

《君は愛しの百日紅》

目が覚める美しい色合いの白、桃、紅の波が風で、ゆらりゆらりと揺れ。晴天の下、目で楽しむ酒のツマミとしては丁度良い。この、つるつるしている木は猿でも滑るなんて言われていて親近感もある。

「うわ……お酒臭いわぁ……」

風情を楽しんでいれば古びた神社に入り込んだ少女が一人、嫌そうに眉を寄せた。少し古ぼけたTシャツに何処かの学校のジャージのズボンを履いていて目を向ければ視線をさ迷わす。

「お酒なんて美味しくないやん……」

ぼそぼそと蚊の鳴く如く子声で少女は呟き。猿は面倒くさそうに言う。

「清酒の美味さは乳臭い子猿にはわからんわ、されされ」

「……こ、ここはアタシが先に見つけた場所なんや……あんたこそ、どっか行っ

てよ」

「ぁあ？　言いたい事あんならハッキリ喋れや」

「……」

少女は目元に水気を膨らませ口を閉じて、そっぽを向き神社の裏手側へと、とぼとぼ歩いて行く。その哀愁漂う後ろ姿を見て徳利のような物の中に入っている薄い黄色味の清酒を飲み干すと紐が付いた丸い壺に乗せ立ち上がる。

「ふん……っ、興が覚めたわ儂がさっちゃる！　感謝せえよ！」

肩を怒らせて大股で、どすどすと古びた神社を去っていく、ちょっと厳つい雰囲気の青年。落ち込んでいた少女は立ち止まり、ぼうっとその大きな後姿を見つめたのだった。

＊＊＊

「なん……また乳臭い子猿か……」
百日紅の根元に座り酒を飲んでいれば少女が現れて無言で見つめてくる。
「……なんや？　呑みたいんか」
「……お酒なんて嫌い」
「ほーん……焼き鳥食うか？」
「えっ」
何処かで買ったらしい透明なプラの箱に入れられた大量の焼き鳥を見せると少女は呆けた顔をして、ふらふらと側へと座った。
「人間は、なんやアレルギー？　とやらが、あるんやろ？　食えるか」
「食える」
「そうか食え」
「うん」

少女は嬉しそうに頷き喉を鳴らすとネギまを一本手にし、もぐもぐと食べ始めた。それを眺めながら酒を口に含み壺の中身を注ぎなおす。
「……これは全部塩味やけど……子猿は、タレの方が好きか？」
「……子猿じゃない優果っていう。あと、どっちも美味しい」
「ふーん。ゆうか？」
「……おにいさんは？」
一本食べ終わり優果が、ちらっと視線を向けて、そう呟いた。
「儂は……猿のってよう呼ばれちょるなあ」
「サルノさん？」
「ふ……っ、まあ、それでええよ」
「ええの……？　ふーん……もう一本食べて良い？」
「全部食ってええ」
「ええの⁉　太っ腹！」

優果は、そう嬉しそうに叫ぶと遠慮せずに鳥皮やレバーやらハツやらつくねと食べていく。

「ユウカは、もう二回り、いや三回りぐらい肉付けちょった方がええな。ガリガリの子猿やで」

「……子猿じゃないし」

「まあ、ええわ」

それ以上、特に喋ることはないのかサルノは酒を無言で呑み。優果は食べれるだけ焼き鳥を食べ続けたのだった。

*

カシャッ。カシャッ。カシャッ。

「こんな奴のが、そんな金になるんか？」
「なるなる」
「ただ、ちょっと殴り過ぎやな引くで」
「顔は止めーよ」
「……ひっ」
眠っている優果の服を脱がし写真や録画をしていた面々に少女は目を覚まし驚愕して父の姿を震えながら探した。
「と、おとお、ちゃ……」
「おい、クソガキお前でも出来る仕事を見付けてやったからな」
「……へ、ぇ、な、なん」
「先ずは顔の傷ある程度なおさんとな」
「立つは立つけどな」

「まあまあ段階、踏んで会員制にせんと、こーいうのは焦らしが必要やろ」
「ま、最初はこれで、ええか」
「おい、おっさん顔は殴るなよ顔は」
「っち、それより金は？」
「ほらよ」
封筒に数万が入っており父は嬉しそうに、その数を数えだす。
「じゃあ、嬢ちゃん。ちょっと自己紹介からいこか」
何かのサイトに載せているらしい。彼らは、そう語り父も資金が入る度に上機嫌になった。顔は一切殴られる事はなくなったが身体を叩く頻度が増えたと優果は感じる。
「はーい、今日も始まりましたユウちゃんと遊ぼ♡　でーす！　皆、全裸待機の準備は良いかな～？」
笑いながら、そんな風にマスクや仮面を装着した男達が言い。父は奥の部屋

で酒を呑み何かを食べている。お腹が鳴った。
「ユウちゃんお腹ペコリンこなの～？　じゃあ、ほら、こーれ♡」
魚肉ソーセージを、プラプラ揺らされて優果は受け取ろうとし。
「手は使っちゃ駄目やからね～」
そう言って後ろ手にされ拘束具が着けられた。
「よしよし、じゃあ食べてみよか」
その日は優果に手を使わせず魚肉ソーセージやバナナや細いロールケーキを食べるだけで終わり少女としては腹が満たされ少し良かった。その理由や内容を理解していないからだが父の暴力を止める彼らに対して少しだけ安心感のようなモノが湧き出していたのも、ある。
「今日は、じゃーん！　バニラ棒を用意したよー！　どんどん、ぱふぱふ～！」
何やらバニラを舐めて食べきれば、ご褒美をあげると言われたので舐めて食べきる。

「はーい、じゃあクリームを塗ろうか」
「え……」
優果の身体に、クリームを塗って鼻から上の仮面を付けた男が少女の身を舐め。嫌がる優果だったが拘束具と、もう一人に押さえ付けられると身動きが出来なかった。
「や、やだ……っ、ご褒美じゃない……」
「ご褒美だぉ～！　キレイキレイになって気持ち良くなれるんやし！」
「全身舐めてもらえて良かったなあユウちゃん」
ふくよかで大きな男が上に乗り、ベロベロと全身を舐められて擽ったいような気持ち悪くて、なのに身体が、じわじわと甘く痺れるような気がして涙が零れた。
「は～……キレイになった、ここに新しい白いクリームかけてくで……」
そう言って下半身の前側が膨れていた男達は何か太い肉を取り出すと優果の

手を使って無理やり握らせたり頬に押し付けたり太股の間に挟んだりして白い液体をぶちまける。
「素股ええな。次の回は、それ重点的にするか」
「まてまて解すの先やないか？」
「せやな。皮むきシーンは貴重やで」

ボクサーパンツと顔を隠すだけの男達が優果に拘束具を付け脚を開かせる。開いた脚の間、股を録画して少女の桃色の陰核にローションを塗り付けた。
「は～早く入れて～……」
「処女取り用の勝負してからやけどな」
「俺、後ろもらうわ」
「そこも勝負やろーが」
ぬるぬるになった陰核を撫でられ撫でられ太股の筋肉が、ピクピクと震える。

「あ～イキそう？　イク時は、イクって言わなきゃ駄目やからな」
「い、イクってな、に……」
「気持ちええとくる奴の……マジか初イキ？　うわっ貴重やん♡」
優果が何か理解する前に腰が上向き、ビクビクと震え。チカチカする感覚に朱い身をした少女は戸惑いを浮かべた。
「は～立つ～ほら、今日は三本舐めてミルク飲みきらないと終わりまてんぉ～」
「ううっ、ぐっ」
「あ～♡　くちマンコちっちゃ♡」
「その間、ここ舐めてあげるからなぁ～♡」
「ほらバニラアイス舐めたみたいに、ペロペロしよーな♡」
「んっ、う、うっ、うぐっ、うごっ」
男の肉棒が押し付けられ優果は逃げたい素振りをしたが背後から掴まえられ拘束具もあり咥内に無理やり肉棒が入り込む。そのまま男が腰を揺らすので苦

しくて涙や涎、鼻水が止まらず息だけが止まりそうになった。
「あ～イクイク♡　処女のくちマンコでイキまーす♡　うっ♡」
ビューッと生臭い液体が咥内に広がり優果は吐こうとしたが。
「はーいミルクは残さず飲みきらないとパパに怒られちゃうからなあ～」
そう言われると恐ろしく不味い液体を、ごくごく音を鳴らして飲み込む。苦しくて苦しくて、もう二度とやりたくないと思った。
「ふぅ……一本目終了……あと二本な」
「ひっ」
それから他の二人の肉棒も喉奥へと押し付けられ優果は死ぬかもしれないと思いながら何とか液体を飲みきる。最後は鉄の味がして彼らの事が、とても嫌いになったのだった。

主人公:花賀　咲子(はが　さきこ)
ブラック企業に勤める社畜
一人称・私

お相手1:丑ママ(ウシママ)
安心感のある巨体筋肉、巨根、雄っぽい、優しい味の母乳が出る、オネエ口調
一人称・アタシ、ママ

お相手2:使いの者
こん狐だったり、ぽん狸だったり、少年、青年の姿をもつ
一人称・私

お相手3:鴉神(カラスガミ)

鴉、人型の姿をもつ
一人称・僕

お相手４：寅
金髪碧眼、少年から青年に変化する
一人称・オレ

★雄っぱい
★母乳
★放尿
★複数プレイ
★求婚
★干支

★使いの者(狐、狸)
★和風ファンタジー
★マニアック
★赤ちゃんプレイ
★ハート喘ぎ
★二穴責め
★逆ハーレム

《妖怪ばぶみ》

★一話目・丑ママ

教科書系素材を作っては作っては売り上げが落ちたことにより社長は部下を呼び出し、お前らの所為だと怒鳴りつける。ここは地獄かと思っていると切れた部下六名の男性方が改めなければ辞めると言い。社長は辞めろと言い。そして、人がいなくなり。本当の地獄は、ここから始まるのだと私は確信した。

事実、前も忙しく終電、終電と残業になっていた職場は終電ですら帰れなくなり仕方がないので朝、シャーワーだけ浴びに帰るという訳の分からない事をして早や三ヶ月。何時寝てるのか寝てないのか。私ってなんだっけ。ロボット？ロボットに悪いか。もう、会社、明日出勤したら爆発してないかな。そんな事を思いながら電車を下りて、ふと、足を止める。

「……えぁ」

眠たさバリバリの頭は、どうやらイカレを湧き出してるらしい。

ああ。

寝なきゃ。

「お布団……」

家の方に足を向けようとして足を一歩踏み出せずに辺りを見回す。

無人駅の電車から下りれば、そこはアパート群が密集する地味な街並みが広がっているはずだ。

だが、どうだろう。

暗い暗い深みをもった群青色の夜空の下。見えるのは洋館と和風が混ざった不思議な建物。

それが道の真ん中に道路という概念を潰すようにドーンっと立っている。

「……おふとん」

眠い。

どうにか、ここから抜け出したくて曲がり角を探すが灰色の高い塀の先には知っているような地味な街並みがあるのに曲がり角が見当たらない。

キョロキョロ。

キョロキョロ。

あれれ。

どうした。

下り間違えたのか。

「眠いのに……」

ならばと駅に向き直り後ろを見て首を傾げる。

なんとも遠い先に駅が見えた。

駅の入り口にはチェーンが、かけられているのも見え。そこの大きな看板の文字が『閉』と書いてあるのが見える。ショボショボする目で暗い夜空の下で、なんともハッキリと見え。終電は無いのだと物語っている。

「うそやん……」
「今晩は」
「へはっ！」
後ろから柔らかい明るい声が聴こえガバリと振り返り後ずさりながら確認すると、そこには何やら黒い鳥のような。
否。
鴉が一羽ポストのようなモノの上に。
「あ、れ……？」
おそるおそる鴉に近づく。
「お嬢さん、お疲れのご様子だね」
「！」
近づいた中腰の体制で口をあんぐりと開いて身体が固まる。
「折角の可愛い顔も身体も台無しじゃないか」

「……か」
「可愛いお嬢さん」
「カラスが喋った！」
「おや」
「え！　え！　なに⁉　頭良い！　カラスが頭良いって本当なんだ⁉　凄い！　やばい！　衝撃！」
「あはははは！」
「わあ！　笑い方がカアじゃない！」
何だか目が覚めてきた。凄い。動画撮りたい。
「お嬢さん、お嬢さん」
「へは」
鴉がふわっと飛び上がり私の中腰だった背中上に乗る。そして耳元で、カアではなく。

「可愛いお嬢さん。名は、なんというんだい？」
「え？　あ、花賀（はが）です……」
「下は？」
「……あー……下は……秘密です……」
「ふ、そうかい」
背を少し上げて、そう言うと鴉は器用に私の背中から肩に足を乗せ背筋を伸ばしてもキチンと肩に乗っている。
「……カラス君は、頭がいいからね繰り返し語られると私は羞恥で死んでしまうかもなので……」
「ほう？」
鴉が首を傾げ身を頬に擦り付けて声を出す。仕草の可愛いさに胸がきゅんとする。
「んー……カラス君の飼い主が、そこに住んでるのかなー……届ける序に、こ

こからの出方訊こう」
私も頬を鴉に摺り寄せて眠たい眼を我慢しつつ屋敷に近づく。
「綺麗で独特な建物ー……」
「好みかい？」
「あ、うん、好み」
「そりゃあ良かった」
「ふふ、うん」
変わった建物というよりは屋敷。まるでＴＶで観る旅館のようだ。ただ和風とは言い切れない、なんともハイカラな装飾で正直ＴＶでも、こんなの観たことがない。鴉を肩に乗せたまま、あんぐりと口を開けて幾つかある赤い門を潜っていく。
垂れ下がる色付きの太い編み込み糸に頭が当たりそうになるので頭を下げて避けつつ潜り抜け横引きの扉の前までやってきた。なんとも大きな玄関である。

「手が汚れておるのう」
「え」
鴉がぽつりと言うもので自分の手の平を見てみると、もやもやと黒い霧の様な汚れが見えた気がした。
「ほら、そこで洗うと良い」
そう鴉が片羽を広げて斜め後ろ先にある岩に囲まれた水場を促す。私は促されるまま、そちらに進み柄杓を右手に持った。
「神社みたい……」
湧き出ている綺麗な感覚がする水を左手にかけて右手にかけて右手で口をゆすいで柄杓を縦にして洗い終わる。終わると何だか身体が少し軽くなった気がした。

カラカラカラ。

後ろで音がして振り向くと玄関の扉が開いている。しかし人影は見えない。そっと近づいて軽くお辞儀をしつつ罪悪感から軽く両手を合わせて中を覗き込む。中は広い玄関で、玄関の奥にはまた大きな襖が見える。

「ご、ごめんくださーい……」

しん……

静かだ。

「おうい。おうい」

鴉が翼を開いて飛び上がり屋敷の中へと入り込む。

「お客人だぞ。出迎えようじゃないか」

「えっ鴉さん……」

思わず一歩を踏み出して届かない鴉に手を伸ばすが鴉は上にある太い縄紐を嘴で大きく突くと、その紐が眼前へ身を伸ばす様に落ちてきた。わあっと背筋を伸ばして紐を見上げればカラフルな鈴が沢山上に付いていて、ぼんやりと眺める。

「鳴らしてみな」

「良いんですか……？」

「それは呼び鈴だからね。呼ばなきゃ誰も気づきやしない」

「な、なるほど……し、失礼しますね」

頑丈そうな縄を手に取り鈴を鳴らす。

カランコロンカランコロン。

何とも耳奥に響く音がした。

「ほうら、おいでになった」
「え……」
前を見れば奥の大きな襖は開き中から作務衣姿の狐のお面を着けた少年が二人が立っていた。
「あ……今晩は」
会釈して声をかける。
「起こしちゃったかな……？　ごめんなさい。あの……お母さんかお父さんか……誰かおられますか……？　少しお訪ねしたい事がありまして……」
祈る様な気持ちでそう言えば二人は、お互いの顔を見合わせて首を揃って傾げ。こちらに顔を向けると同じ調歩で近づいてくる。
「ようこそ」
「こちらへ」
そう言って自然と片手ずつ手を取られ奥に引っ張られていく。

「あ、く、靴を……」
仕事用の踵の低いヒールを脱ごうとして足下に目を向ければスカートの下はストッキングのみ。慌てて顔を後ろ側に捻って見えたのは閉まった玄関扉と黒い質の良さそうな着物を着た男が私のハイヒールを手にしている姿だった。
「え……」
笑顔の男は軽い感覚で艶の良い黒髪の下の紅い瞳を片目瞑りウインクをする。
「今宵は寅殿の席が空いております故」
「あ、あの」
意外と強い力の子供達に顔を向け直して声をかけ。
「い、今、後ろに男の方が居たのですが……」
「酉（とり）殿は、まだまだ先でございます」
「もうすぐ貴女の年ですものね」
「楽しみですね」

「時は、すぐですよ」
「僕としては君が呼ぶなら何時でも良いけどね」
「っ……！」
耳元で囁かれれば背の高い彼がいた。飄々としたような雰囲気で身を少し屈め、こちらの目を覗き込んでくる。紅い瞳の近さに身がギクリと固まり足が止まった。
「呼ぶならそうですね」
「酉殿が言うのなら、そうなのでしょう」
動きを止めた子供達が私の手を握りながら楽しげな口調で呟く。
「トリさんを呼ぶ……？」
「そうさね」
酉が私の肩ほどの髪を指で梳き結ぶ安い黒ゴムを解り。
「求められる事は悪くない」

「……うっ」

あまりに近いので瞼を瞑れば額に柔らかいものが触れる感触がした。

ガチガチに固まっていたけれど静かな様子に瞼を開ける。開けると、そこには彼の姿はなく。唖然と前を見据えた。

「さあ、こちらです」

「行きましょう」

子供達の手に引かれて頭の中の混乱を感じながら私は足を進ませたのだった。

＊＊＊

「おうい、おうい」

「丑（うし）殿、丑殿」

「お出迎え頼もう頼もう」

りん、りん……

子供達に手を引かれながら襖だらけの長い廊下を歩いていれば鈴の音がして襖の一つが開いた。

「はぁい……」

のんびりとした口調で出てきたのは天上に頭がぶつかりそうな大男。ガタイが良く筋肉質な身体をしている。あんぐりと見上げていれば視線が合った。

「あらぁ？　可愛ぃわねぇ……」

オネエなのかな。身体に見合わず優しげな表情で私に手を伸ばし頭を撫でてくる。

「丑殿、出番ですぞ」

「おもてなし致しましょうぞ」
「まぁまぁ……お久しぶりねぇ……前は確か……」
「話は寛いでからに、しましょうぞ」
「湯を用意してまいります」
「汗を流さねば」
「うふふ……そうねぇ……お嬢さん何色が好きかしら？」
「え……えっと何色……んんっと……明るい色が好きです」
気が付けば子供達は側に居らず私は丑と部屋の中で座椅子に座った。小さな箪笥のような火鉢の上に白い餅が乗せられ下ろされた薬缶からは湯気が立っている。
「黒豆茶か……アタシお外のココアも好きだから、それもあるわよミルクたっぷり入れて飲む？」
「あ、えっと……ミルクココアは眠ってしまうかもなので、お風呂後に……っ

て、注文つけて、すみません！」
「あらぁ？　気にしないで良いのよ。ふふ。お茶を飲んで水分補給しましょうねぇ」
良い香りのする燻られたらしい黒豆が急須の茶こしに入れられ上から薬缶のお湯を入れて蒸されると少ししして黒豆茶が湯飲みに注がれて、おぼん上に置かれた。
「いただきます……ふぅ……美味しい……」
「ふふ。お餅食べる？」
「……あ、頂きたいです」
「味は砂糖醤油、海苔醤油、きな粉蜂蜜、黒胡麻、餡子もあるわよ」
「ええ……最高じゃないですか……！　きな粉蜂蜜気になります」
「じゃあ、そうしましょうね」
優しい微笑みで黒豆を磨り潰したきな粉と蜂蜜を皿に用意してくれる丑。そ

の姿をお茶を飲みながら、ぼうっと眺めて思わず呟いていた。
「ママ……」
「あらぁ？」
「はぇ!? あ、こ、こ、これは、あの……癒される感じが……そ、その……」
かぁっと頬が朱く染まり、しどろもどろになる。
「んふふ。良いのよぉ好きに呼んで。なんだったら、おっぱい飲んでも良いわよぉ」
「へ？ お、おっぱい……」
丑の盛り上がった筋肉質な身体を見た。少し着崩した着物の胸元、胸筋は、これでもかと盛り上がっており、おっぱいと呼べるモノが存在している。
「……ママのおっぱい……を……？」
男性の胸筋から生まれる乳を雄っぱいと呼ぶとウェブ小説で読んだ事がある。確か力を入れていないと柔らかいとか。ごくりと喉が鳴った。

「……さ、触っても……？」
「もちろん好きなだけ良いわよぉ♡」
着物の前側をずらして雄っぱいを見せてくる。バキバキに割れた雄々しい身体に鎮座する逞しすぎる胸筋。どういう事なんだ。凄い、おっぱいじゃないか。
「……っは、ふぅ……ふぅ……」
仕事疲れで思考がおかしくなっているのだろうか。あまりの魅力的なお誘いに息荒く身が乗りだしてしまう。

ふに……

指先平が柔らかさに触れた。
「は……ひゃ～！」
思わず片手で自分の顔を隠して天上を仰ぐ。柔らかい。おっぱいだ。

「んふふ♡　遠慮しないで触って♡」
「ぁ、ぁ……」
指先平だけ触れていた片手を取られ、わしづかみを促される。手が気持ち良い。最高だ。
「マぅマぁ……」
「ほらぁ……アタシのお膝に、おいで」
「ぁぶう……♡」
座禅を組んだ膝上に座らせてもらい頬が雄っぱいに触れる。頭を撫でながら丑ママが動く度に顔が挟まれて気持ちが良かった。好き。
「ほらぁ、お餅よ。あーん♡」
丑ママが、あーんしてくれるので口を開けて、もぐもぐする。美味しい。豆の香りが強い大豆と甘く深い味わいの蜂蜜が素晴らしく涙が零れた。
「……ぅぅぅ、おいしい……おいじぃ……っ、ぅ……ぅぶぶ……」

泣くと、きな粉が飛んだ。涙、鼻水、きな粉と顔が地獄絵図になったが、そのみすぼらしさを気にせず丑ママは頭を撫でて顔を布で拭いてくれる。ママだった。

「良く噛んで飲み込めて偉いわねぇ。よしよし♡」

「ママぁ……♡」

唇を親指で擦られると思わず、その指に吸い付いてしまう。ちゅうっと吸うと額に柔らかい感触がした。見れば、丑ママの慈愛深い微笑み。

「吸う？」

ふと胸筋、雄っぱいが差し出されて震えながら唇で挟み小さく吸う。吸うと、ほのかな甘さが口の中に広がった。

――……ママのミルクだっ!!

一度、舌に味わうと止まらない。その優しい味わいは、まさに母乳といえるモノで喉が渇いてたいたわけでは無いが身体全体が認めて思わず吸い付いてしまう。

「んく……っ、んくっ、んくっ」

喉が、ごくごくと鳴る。たまらない味わいに私は歓喜した。片側の柔らかい雄っぱいを揉みながら唇の中で舌を動かし、もっと、もっとと求める。

「そっちだけで寂しいわ」

丑ママが私の頬を撫でて、もう片方も差し出すので、ちゅっぽっと乳首から唇を離し片側も吸う。美味しい味わいが口いっぱいに広がって私は、ぎゅうっと丑ママに抱き付いて、じゅうじゅうと啜り続けた。

「……けふっ」

「うふふ……たくさん飲めて偉い偉いわねぇ♡」

「ママぁ♡」

よしよしされながら慈愛の微笑みを見上げて、うっとりと見つめる。私は完全に赤ちゃんと化した。

「ふふ……あらぁアタシとした事が名前聞き忘れてたわぁ……」

丑ママの困り顔に慌てて内緒にしていた名前を答える。

「名前……咲子（さきこ）……」

「そう。さきこちゃんね」

「うん……皆にからかわれて嫌な名前……」

「あら綺麗な名前なのに……」

「……花賀咲子って言って子供の頃から誤字って花が咲き子って……頭の中がお花畑って意味って私らしいって社長は毎回言うの……」

「まぁ……そんな風に言われたの？　腹立っちゃうわね」

「映る姿は鏡となる。そうさな其奴、球根にでも、してやろう」

「……へぁ？　ぁ、カラスさん」

私達の側で羽を落ち着かせている鴉を見て、ぽろぽろ溢れていた涙が止まる。
「咲子殿、咲子殿」
「湯に浸かり涙を流しましょうぞ」
「あっ、私……」
狐お面の二人もいつの間にか居て部屋奥の襖を開けて促してくる。何故か襖の先には露天風呂が見えた。

主人公:あなた
ゲーム名:ＰＫ大っ嫌い
卒業後お見合いで結婚したが上手く行かず浮気妊娠され白い結婚で離婚した。その後、田舎の空き家で暮らし従兄弟からもらった初期型のＶＲダイブで○○村という開拓系ゲームを、のんびりしていたら用途を知らず興味本位でシークレットショップに入ってしまい。てっきり普通の販売アイテムの試供だと思えば、エッチな事に巻き込まれる日々になり沼ってしまう。

お相手:土木うずら
ゲーム名:痴漢大好き容疑者君
エッチなシステム開発をフリーでする天才。現実は童貞だけどゲーム内では遊びまくっている。女性限定の試供に間違って来た主人公の個人情報を掴み。盛り上がり、それから毎日、ゲーム内で誘って自分の作品の試供相手にしている。

主人公からは変態さんとしてキャラが変わる度に変態〇〇さんと呼ばれている。
主人公は気づいていないけど資産力のあるストーカー。

モブ·ＡＩ住民達。
主人公からは三兄弟と呼ばれるエーイチ、エーニ、エーサン。
兄、彼氏役をしたビィ。
弟、痴漢役をしたシィ。
などが存在する。
皆エッチな学習機能が備わって学びが激しい。主人公の事が大好き。

★モブ姦
★複数
★本命はウズラ

★仮想空間内で痴漢やらレイプやらの遊びを同意でする
★場面はレトロ個室で複数、デート中の試着室痴漢、デート中のエレベーター痴漢、兄弟と修理士でのエレベーター尻壁風、部活彼氏ありからの幼なじみ寝取られ、美術ヌードモデルバイト先の先生とラブえっち、最後は現実でウズラとラブえっち。
★おしっこ飲み
★ちょいＳＦ風、類似な近未来な別世界。
★貞操観念は低い
★ハート喘ぎ
★ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ

《仮想空間えっち》

話題の仮想空間現実機器、ＶＲダイブ初期型を従兄弟から譲ってもらった。最新型を買って処分にお金がかかるし売るにしても愛着もあるから取りに来れるならと譲ってもらい。早速、起動して最初はオススメ広告のＲＰＧの世界に行って、のんびり、やっていこうと一ヶ月ぐらい楽しんでいればＰＫに遭い怖すぎて止めた。森で薬草採取してただけなのに唐突にボコボコにされ切り刻まれるという行為。数日前に外のフィールド上でならプレーヤー同士でも戦えるよと実装されていたらしい。初期は攻撃可能状態だったそうだ。そんなの、せめて不可で始めてほしかったし、あまりにショックで呟けば、それが醍醐味と合ってないんじゃない等言われ確かにと思う。

合わない作品はするべきじゃ無かったのだ。もっと、コツコツやってボコボコにされないゲームは無いかと思えばオンライン、オフライン、プライベート

エリア設定、初期は基本オフと殻に閉じ困るのを推奨してくれてそうなゲーム『〇〇村』を見付け始めてみた。

この〇〇村は個人の自由で村が作れオフラインで、のんびり生活をしても良いし自分の独創的な村を相手に見せても良いし基本、平和なゲームらしい。ほのぼのと遊びフレンドと挨拶をしたり一日一回誰かの村に遊びに行くとポイントがもらえてアイテム交換が可能なので出来たフレンドと挨拶を交わす。

課金しなくても充分楽しいし課金すれば、また面白く独創的な要素が増えたりもする。依頼で近未来都市を作ってもらう人もいた。全部で六十万リンスしたらしい。

「え～？　フリーで畑をダウンロードさせてくれる人もいる」

自分の村はシンプルな箱庭みたいな村だったので何か課金をして、ちょっと発展させようかと色々なジャンルを見ていたらシークレットショップというのを発見する。一体、なんだろうと覗き、何やら色々な言葉が書かれている。

『オネショタ』『オニショタ』『ＴＳ』『アオカン』『ショクシュ』『スライム』『オスッパイ』『サクニュウ』『フタナリ』『壁穴』『コスプレ』『部活』『先輩』『後輩』『先生』『店員』『Ｓ』『Ｍ』『ペット』『教室』『運動場』『体育館』『体育倉庫』『保健室』『男子トイレ』『女子トイレ』『プール』

ずらーっと並ぶ色々な名前を見て何かの素材を売っているのだと思い知らない単語が最初は多かったが段々と知っている単語が出てきて学校を作ろうとしているのかと思った。

『駅』『列車内』『駅員』『車』『運動着』『水着』『試着室』『シャワー』『ロッカールーム』『機械』『玩具』『遠隔操作』

「なんか細かい？　こう、まとめて学校セットとか無いのかな？」

ふと見れば女性限定、学園通勤から駅内お試しセットを発見した。

「え、学園通勤から駅内のお試しセットあるんだ。試してみようかな」

パッケージの制服が可愛い。ちょっとミニスカートだけれど、まあ制作者さんの好みなので早速遊んでみる。

基本、通信教育で学校に行く時は制服は無く私服だったので憧れの制服を着れるだけで嬉しい。お試しセットは自分の敷地内では、遊べないけど制作者さんの敷地内なら遊べるものらしい。気に入ったらダウンロード購入するという仕組み。随分と良心的な設定だと思いつつはじまった。

駅だ。天井を見上げて唖然とする。ちょっと想像と違う駅だった。何だろう洋風ＳＦファンタジー駅で目の前に鉄道列車がパプーっと警笛を鳴らして止まる。桃色の煙が流れているのを見て、よりファンタジーさを感じた。煙は桃みたいな香りがする。甘くて何だか身体が、うずっとするような。

「いらっしゃいませ、お嬢様切符を拝見しても？」

「あ、はい！」

さわやかな駅員さんの白い手袋の手を出され慌てれば手に握りしめていたらしく腰を優しく抱かれて切符を取られた。

「マロンピーチ学園行きですね。では二等客室三番席へどうぞ」

切符を返されて頷く。鞄一つ持って三番席へ行けば中には相席となる男子生徒が三人いた。広めの四人がけの向き合った椅子の間には倒す事の出来る机があるが今は上げられている。

「こ、こんにちは」

ツバ付き帽子を深くかぶっている顔がよく分からない三人は挨拶を静かに返してくれた。

「……ぉお」

パプーっと大きく汽笛がなって鉄道列車が動きだす。流れる景色は本物みたいに自然で綺麗で、ぼんやり眺める。町並みの後、山々に畑が並んでおりワクワクだ。

私が、ソワソワしていれば黙っていた三人が喋りだす。
「名前は何て言うの？　俺はエーイチ」
「俺はエーニ」
「俺はエーサン」
名乗る名前って多分、ゲーム名かな。
「……あ、私はＰＫ大っ嫌いです」
自分の名前を答えて考える。多分、Ａ－１そういった意味の名だだろう。購入したら多分、自分で名付ける筈だから何て付けようかなと考える。現時点で凄いしレトロな感じが気に入ったので購入予定だ。
「君もマロンピーチ学園に行くの？」
「うん！　楽しみだね！」
「ああ、そうか……今年から共学になったんだっけ？」
「え？　違ったの？」

「知らなかった？　昨年までは男子生徒のみの学園だよ」
「君って、とっても可愛いしモテるだろうな」
「美人と過ごす学園生活かあ……」
「俺ら運が良いね」
「へ！　あ、褒める機能付き!?　きゃ～何か嬉しい」
義務教育卒業後、親の知人の勧めで、お見合い結婚した旦那と上手くいかず半年で浮気され相手に自然妊娠の子供が出来たから別れてくれと言われ実家の方の掃除だけしていた空き家に独りで住むことになった。従兄弟には『その若さでバツイチとか流されすぎ、もっと遊べよ』っと言われた。なので、きっと私にＶＲダイブを譲ってくれたのだろう。初期型だって高く売れる品だ。
「ねぇ。俺らと仲良くならない？」
「俺らは君と、とっても仲良くなりたいんだ」
「どうかな？」

「え～！　もちろん！　よろしくね！」
握手を求められたので握手を一人づつ返すと妙に、ベタベタ手を触られて、びっくりする。とはいえ仮想空間のキャラだし、そういうものなのだろう。
「はぁ……可愛い……♡」
「女の子と始めて手を握っちゃった♡」
「あ～柔らかい……♡」
三人が盛り上がりだす。
「手も、ちっちゃい……女の子の手だ」
「えぁ、ありがとう……」
手を離すタイミングが分からなくなった。皆、手の平の大きさをはかりあったり指を絡めてきたり。
「……ん」
手の甲を指先で撫でてきたり。

「可愛い」
「どうしようドキドキする」
「これが興奮……」
ＡＩロボットというよりはＡＩ住民だろうか。学習機能付きで、きっと何かを覚え中なのだ。
「ねぇ、ちゅーして良い？」
「わかる。ちゅーしたい」
「記念にしよう」
「え、ちゅーってキスの事？　え……えっと……」
「そうだよ」
許可する前に手の甲にキスをされ、なんだ手にかと思い気を抜く。
「ん……くすぐったい……」
三人は、それぞれ奪い合いながら手にキスをし繰り返し甲だけじゃなく手の

平や手首にもされ。
「きゃ！　んっ」
何故か指先を口に含まれて吸われてしまう。柔らかい唇を強く感じドキドキしてきた。
「あ、あの……」
「可愛い……」
「声も可愛い……」
「もっと聞かせて」
「え」
凄い褒めてくる。気が付けば片側の席に私を間にして三人座っており。一人は前側に座って私の閉じた膝外に膝を広げた。
「スカート短いよね」
「白い肌が丸見えだよ♡」

「わかる。ずっと気になってた」
前の子が私の膝を撫で前側から指を滑らせる。太股の間に、指を入れて滑り上げて、えっとなった。
「やばい……こんなに柔らかいの？　なんで？」
「あのっ」
「耳も柔らかい」
「ひゃっ」
耳縁を摘ままれ撫でられて身が、ぴくんっと跳ねる。
「ねぇ暑くない？　俺、暑いや」
一人が上着を脱いで前側の席の空欄へ投げ置く。内側からサスペンダーが出てきて内側のシャツのボタンを取っていくので、ギョッとする。
「え？　ええ？　そこまで脱ぐの？」
「うん？　暑いからね」

不思議なことを聞いてくるといった表情をして胸元が見え筋肉が出てきた。学生設定だけど思ったよりある。ハッとして瞼を瞑ったらヌチュっと音がして耳が温かく柔らかいモノに包まれた。

「ひぅ♡」

片瞼を開けて身を仰け反らしながら見れば耳を舐められている。

「そ、そんなっ♡」

止めようと喋ろうとすれば顎を掴まれ上半身裸のツバ付き帽子少年が私の口を唇で塞ぐ。

「んぅ!?」

ＡＩ住民の学習機能が変な方向に行ってしまってる。どうしよう。此処の制作者さんにバレたら、ドン引きされるんじゃ。

「んぅぅ……んくっ♡」

設定上では、うぶ少年達って感じだったのにキスが上手すぎるし的確に気持

ち良い処を探している気がする。良いと感じたら重点的に、そこを狙われるのだ。

「んぅ……♡」

舌が絡む。絡むと唾液が口端から零れ。耳が舐められ穴を弄られて、くちくち音がする。何故、こんな風な事が起こっているのか。それに、この気持ち良さは何なのか。

退かそうと震えていた手を片手ずつ取られて止められる。どうしようと思っていれば前側の少年が座席下にしゃがみ込み膝を、パカッと開いて片脚ずつ左右の少年の片膝にかけられ、もう片手ずつで押さえられた。連携プレーだ。

スカートが捲られると太股の際どい部分が見えて白と桃色の下着が覗いた。入ってきて確認していなかったので驚いたのだが横紐型のショーツだった。紐パンを見た少年達から口笛が上がる。

「可愛いのにエロい！」

「エッチすぎる！」
「童貞の夢がつまってる！」
「ありがとう♡」
「俺達の為に……」
「可愛いくて、エッチで優しい理想の彼女じゃんか……」
この服装にしたのは制作者さんの意向だしＡＩ住民君達も、そこに影響されているので別に夢を叶えようと私が選んだわけじゃない。盛り上がっているので言わないが。

――……そうだ！　ログアウトすれば良いんだ……！

そっと指先を動かしてログアウトしようとする。先ずは画面を任意のパス動作で出さないと。

「……っは♡　えっち♡」
「え？　あっ！」
パス動作をしようと指を動かしていれば相手の乳首を指先で弄っていたらしい。上半身裸少年の乳首が立ち上がっている。
「ご、ごめっ」
「だーめ♡　仕返しするぞ～♡」
「えぁ！　こ、これ以上は……っ」
私の上着部分のボタンが外されて中のリボンが取られシャツのボタンも上側が外される。
「前留めだ！」
「エロの為のやつだ！」
「下着のオソロで……完全そうじゃん……」
「え？　きゃぁ！」

ブラジャーの前留め部分が外されて乳房が、ぶるんっと飛び出た。あまり考えずに元の肉体をスキャンして〇〇村で遊んでいたが、何だか自分がレイプされそうな気がして恥ずかしい。

「あ、あのっ、ま、まって、ひんっ♡」

左右から乳房に吸い付かれ、ビクンっと身が跳ねる。甘い快感が気持ち良い。

「ぁ♡　だめっ♡　ふぅぅぅ……♡」

そういえば前のＰＫされたゲームでは痛みが怖くて最初の段階で痛覚メーターを最低ランクまで下げておいた。おかげで切り刻まれても抓られるより痛くなかった。でも怖すぎたし嫌いだ。

このゲームの痛覚メーターは、どうだろう。そもそもで仮想空間内での初期設定があったきがする。快楽は痛覚と同じなのだろうか。味覚は現実と同じだと聞いた事があるけれどアレルギーは無いから食べれないものが沢山、食べれる部分もＶＲダイブの人気の一つとか。

「ぅう……♡　でも、こんな卑猥なっ♡」

ショーツの紐が取られて空気が触れる感触。まるで現実みたいだ。

「やだ♡　あっ♡　なめっ♡　ない、で……っ♡」

太股の間。引きこもってから整えてないお風呂で見かける、ちん毛が生えている。そこに顔を埋めて、ぺろぺろ。ぺろぺろ。ピクピク震えて甘い感覚に身が溶けそうになる。

――……完全に未成年禁止行為なのに……こういうのって専用のソフトが在るとは聞いたことあるけど何で、〇〇村で……あ、まって……そういえばシークレットショップって……

シークレットショップに入る時、何かの『確認中です』って間が二、三秒あった。もしかして、あの時に年齢確認されてたのか。

それにシークレットという名前って今考えると、ちょっと怪しいし言葉が色々分からないのがあって最初、困ったけど考えてみると、もしかして、あれは全部、卑猥な用語だったのかも。

「あ、あのっ、もしかして、こ、これって♡　ひぅ♡　ん……ひ、卑猥な……げぇむ？　あぅ♡」

聞いてみたがＡＩ住民達は、それぞれ乳首を吸ったり陰核を吸ったりして答えてくれない。

「あのっ、わ、わたしっ♡　ってきり……♡　駅と列車の無料お試しだと思って……♡　ふぅ♡　よ、良かったら買おうって……♡　はぁ♡　はぁ♡　スケベなのだって思わなくて……っ♡」

ガチャンッ。

「え？　そうなの？」
「きゃっ！　え、駅員さん！」
個室席の扉が開いて最初に出会った爽やかそうな駅員さんが不思議そうな顔をして覗き込んできた。
「それとも、そういうプレイ中？」
「プレイ？　あ、あのっ、もしかして♡　制作者さんですか♡　んぅ♡」
「そう！　痴漢大好き容疑者君です♡　僕のって購入者は居るけど、ガチの女の子で、お試しは初めてだから嬉しいよ♡」
「えっ！　ち、ちか……凄い名前ですね……」
「ＰＫ大っ嫌いさんも中々、想いが強そうな名前だよね♡」
「ぅう♡　初めてしたゲームで……よく分からないまま切り刻まれて……♡」
「うわ～ＲＰＧ系かな？　強制ハードプレイな事もあるらしいよね。した事無いけどプライベートシステム内の依頼は来るから、そういう時に雑談して聞い

たよ」
「はぅっ♡　もっ♡　と、止めて♡　くれませんか……♡」
「はあーん？　止め方も知らない感じか……普通、女の子来ないし作業中断して飛び込んだけど……いや～♡　もしかして、そのキャラのフォルム弄って無いって事？　僕も髪と瞳以外弄ってないけど……」
「んぅ♡　っ♡　つくるの、たいへん♡　ですか、ら……っ♡　ぁ、もっ♡　だめっ♡　だめっ♡」
腰が浮かぶ。左右の乳首と陰核を吸われた状態で、ビクンっと腰が震えて内側から液体が噴き出す感じがする。気持ち良くて頭の中が真っ白だ。
「ひ～♡　エロ～♡　ぇえ？　どうしようか。ちなみに本気で嫌ならＮＧ行為って言葉の後にゲーム名を名乗れば良いよ」
「えぬぃー……んぐっ♡　んぅ♡」
隣の子に口の中に舌を入れられた。

「はぁ♡　あ～♡　立つなぁ♡　えーっと？　アレだね。君って個人情報ガバガバだね。え？　まさかの十九歳で離婚歴あり!?　やば♡　人妻♡　えーっと……」

何か情報検索をしているのか彼の瞳や指が動いている。

「卒業後お見合い結婚……わーお。今時、古風～♡　そういうの好きだよ♡　え？　旦那が半年で浮気して子供こさえて離婚……まじか……何故、当時十八の娘さんとのラブラブ新婚生活を置いて……これ以上の理由は書いて無いかあ……？」

一体、何を読まれているのだろう。

「ん、自然妊娠派って事は……宗教的な方かも。今時、リスク背負って出産なんてＶＲダイブの中だけつーか……」

言われてみると自然派の一族だった気がする。ド田舎出身なので私が猟師免許を持っている処が結婚の決め手だったし。自然妊娠自体は死なないように配慮してくれるならって最初は思ってたけれど行おうとした初夜は痛すぎて中断、自然出産は、それ以上の地獄の痛さに苦しむとも聞くし、どうだろうか。

「本来の姿で制服似合いすぎだし……あ！　フレンド登録しよーよ♡　何なら毎回、俺のプライベートな試験場の体験して一緒に遊ぼ♡」

才能は、とても凄いけど、ちょっと怖いし遠慮しておきたい。

「んーんっ♡　んんっ♡」

舌を絡まされ乳首は吸われ弄られながら陰核を吸われ続けていると何も言えない。

「は～♡　可愛すぎないか……あ～……ほら、フレンド登録ＯＫするだけだから！　ね！」

前側に、ズイッと出てきたウインドウに震える手が少年によって向かされる。

「もっと俺達と遊ぼうよ♡　早く中に入りたい……♡」

少年の一人が乳首から口を離し両方指で弄りながら言う。

「あはっ……コイツら毎回、お試しセットの番人になってるＡＩ住民だからさ～期待で学習機能上げちゃって、え？　もしかして好きになったの？」

「うん、主様。この子、好き」
「好き♡」
「我慢苦しい……」
指先がフレンド登録ＯＫに触れる。認証の色になった途端、駅員さんは指パッチンをして何かが変わった。プライベートルーム内とフレンド上部に表示されている。
「え……っ、きゃっ！」
「あれ？　入らない！　でもっ♡　気持ち……♡」
目の前の少年がズボンの前側を開けて性器をボロンと取り出すと私の股の間に滑らせて混乱している。
「まあ童貞だもんなあ……此処の……ん⁉　え、君って処女なの⁉」
「んっ♡」
「そのままスキャンなら……この生々しい毛もわかるし……え～♡　立ち過ぎ

て、ちんこ痛くなってきた……♡」

白い結婚なのが何故、バレたのか。処女って、そんなに見た目で分かるものなのか。

「処女にいきなり入れるのは童貞でも許されないぞ～。ほら画像を出すと此処をな、舌や指で丁寧に解さなきゃ」

手作りらしいフォログラムが浮かんで少年達に指導が入る。

「あ、主様っ♡　俺、もう、出る！」

びゅるるるる～！

あっと思った瞬間に白い液体が私の股や太股にかかった。生温かい。

「はい！　お嬢様、僕が今から解しましょうね♡」

出し切った少年がフラフラしながら前側の椅子の奥に足を上げて横に座り駅

員さんが私の前に来てしゃがみ込む。駅員さんが手を揺らすと少年が出した精液が消え。

「あはは！　密度高っ♡　あ～匂いも良い♡　本物も吸ってみてーなあ……♡」

彼は割れ目を開き表面を指平で、くにゅくにゅ撫でる。その指が私の穴の表面に触れたかと思うと、くち、くちっと音を立て片手の指は陰核を弄りだした。

「ひゃぅ♡　ぁ、え♡　さ、触りかたっ♡」

「気持ち良い？　僕もなあ……ＶＲダイブで遊びまくってはいるけど現実は童貞だからさ～。なんか、リアルっぽくて良いなあ……♡」

駅員さんは顔を、ピッタリと合わせると穴の表面を丁寧に撫で舌を入れ込む。

「ぁえ♡　ふぁう♡　う♡　う♡」

陰核を優しく回されながら内側に舌が入り込むと圧迫感に身体が驚いて身が、きゅーっとして甘く震えた。

「んぅまっ♡　はいふぉ～♡」

舌を入れながら喋らないでほしい。左右の少年達はズボンの前側を、はだけると性器をボロンと出して私の片手ずつを添えて弄りだす。にちにち、にちにち音がする。

にちにち♡　にちにち♡　じゅるるるる♡

私の股の間を激しく吸い上げると顔を離し駅員さんが笑顔を見せる。
「初めてが上手くいくように、セックスの練習しようか♡」
「えあ♡　えっ♡　こ、こわい……♡」
左右で少年達に乳首を吸われながら顔を左右に振って断ろうとするが。
「うんうん♡　だいじょーぶ♡　現実でする時に怖くならないようにするんだよ♡」
指が、にゅるっと入り込んだ。舌よりは入りやすいかもしれない。

「は～♡　これって毎回、処女の締め付けになるんかな？　あ～気になるっ！」
駅員さんの指が、ゆっくり二本入ってくる。
「ほーら♡　ぬこぬこしながら入れるからね～♡　あ♡　この、つぶつぶ感と締め付け……は～♡　楽しみすぎる……♡」
指を広げられて中に空気が入る感覚。その内側から、こぽっと液が滲み出る。
「は～♡　トロトロ愛液いただきまーす♡」
変態だ。考えてみると痴漢大好き容疑者君さんは名前からして変態だ。でも、そんな彼の作る世界と行動に気持ち良くなっている私は何なんだろうか。私も変態だということなのか。

ずるり。

「あっふ♡　あっ♡　あ♡」

「は～♡　うまうまっ♡」

彼の肩に両脚をかけられて尻が持ち上がり上半身が左右の、少年の膝に乗せられて男性器を頬に押し付けられる。変態駅員さんは私の大事な部分を、じゅるじゅる、じゅるじゅるして変に甘ったるい声が上がってしまう。

「ひぁ～♡　ぁ♡　ぁあん♡」

「俺のが、ほっぺに、ちゅーしちゃった♡」

「唇にもしよ♡」

少年達の男性器が私の唇を、くにくにと押す。

「あーん♡」

「ぺろぺろして♡」

はっ、はっ、はっと息が上がる。列車内のレトロな内装。幾何学模様の布張りの壁。味のある木類の扉。視線を動かせば期待の隠った視線。胸奥がドキドキと高鳴る。唇を恐る恐る開ければ先っぽの透明な液体が、とろりと左右から

落ちてきて薄しょっぱい。舌を少し出して先っぽを、ぺろぺろすれば左右から甘い声が上がった。

「はー……♡　はー……♡　じゃあ入れるね♡」

ぬち……♡　ぬぷぷ……♡

「んむっ♡　うぁ♡」

圧迫感に、おちんちん舐めが止まる。左右の少年は戸惑う私の片手に指を絡ませて、ぎゅっと握ってくれた。

ずぷんっ♡

「うぁあ～♡」

不思議と痛くなかった。初夜、旦那に入れられそうになった時は痛すぎて号泣し大袈裟だと怒られて、その夜、旦那は出て行ってしまい滅多に帰って来なくなった。初日から上手く行かなかった結婚生活の事を考えれば変態駅員さんの言うとおり練習は大切かも。こうなるって経験があれば次は怖くないかもしれない。

「やべ……♡　もってかれる……♡　即イきは、ちょっと……っ、んっ♡」

「主様が終わったら俺達の番だから早くしてください」

「そうですよ主様」

「そもそも本来、俺らがはめたおしでしょ？　何で主様入ってきてるのさ」

「君ら自我強いな！」

変態駅員さんは笑い。少しの間、腰を奥まで、ぴったり密着させていたかと思うと、ゆっくりと前後しだす。

「あっ♡　ぁっ♡　あっ♡」

動かされると腰が浮かび、ぞくぞくする。何で、こんなに気持ち良いのだろう。

「はぁ♡　リアル蕩け顔♡　あ～可愛い♡　んぐっ♡　あ～もっ♡　出る♡　でるっ♡」

びゅ～～～っ♡

内側で温かい液体が、ぶわっと広がる感触。その刺激に、きゅんきゅん膣内がうごめいた。

「はぁ♡　憧れのイってる中で腰動かし……っ♡　くはっ♡　きく～～～♡」

「あっ♡　めぁ♡　あめっ♡　らめぇ♡」

「このまま連続射精するぞ～♡」

そう変態駅員さんが言うと少年達からブーイングが起きた。左右の少年達は

仕方ないと息を吐くと私の唇に再度、男性器を押し当て私は揺すられながら舐めて握らされて擦ってと繰り返し。

びゅっ♡　びゅるるっ♡　びゅるんっ♡

口内に出されたり顔にかけられたりした。変態駅員さんは宣言通り内側で射精をし左右の少年が出すと私を持ち抱える。彼の一振りで顔の精液が消え唇が合わさった。

ちゅう♡　ちゅうう♡　ぢゅる♡　ぬぷんっ♡　ぱちゅっ♡　ぱちゅんっ♡

「んぅ♡　んっ♡　んっ♡　んぅうう♡」

座席に腰かけた駅員さんの腰上に私は座らされお尻を掴まれ上下をされる。

緩い速度で肉がぶつかりながら唇が合わさり舌が絡み合い。内側からの膨れる快感に私は酔いしれる。
「主様、何度するのさ～！」
「俺らもしたい！」
「ね、主様とするの飽きたよね!?」
何度出されたのか分からない。気持ち良さの連続に飛べない意識の中で揺すられていれば少年達から再度、ブーイングが上がった。
「はぁ♡　はぁ♡　ね、僕の形覚えた？　初エッチの時も、この形になるからね♡」
私は、ぼうとしながら聞き性器がズルリと抜けて少年達に渡される。
「僕は、ちょっと離れるけど、また後で♡」
「あうっ♡　あっ♡　あっ♡」
少年達は交互に私の体勢を変えながら男性器を出し入れし口内に入れて射精

し飲ませてきたりと繰り返し繰り返し、その後、どうやってログアウトしたのかは覚えていない。ただ起きた時は汗だくで股の間は、えっちな液体でビチョビチョ。まるで、お漏らしみたいだ。

――……あれだけしたのにムラムラする……♡

その後、クリオナニーを寝落ちるまでしたのだった。

主人公:魔法少女H（ヒデナイト）
黒目、黒髪、巨乳。良い身体をしている。（変身時は髪と瞳はヒデナイトに変化）
初代魔法少女、27歳。モチーフ色、ヒデナイト。上司にあたる年老いた博士からセクハラ、パワハラを受け世間的には今だ人気があるが魔法少女を辞めたくて仕方がない。夢や希望は気づけは貯金を貯める事の日々。老後を考えるなら、もう少し貯めた方が良い気がするが悩み憂鬱。定期的に怪人毒林檎のオナペットにされるが性的なストレス発散になっており魔法少女としての僅かな自負で自己嫌悪を感じている。正義の戦隊のレッドのカヲルが毎日会うたびに自分のパンチらで自慰をした報告をしてくるのも憂鬱な一つ。でも可愛い後輩ではある。昔は正義に燃えていた。
一人称、私
「正義って何だったかしら……？」

お相手1:カヲル

栗色の髪。栗色の瞳。爽やかで優しそうな好青年。最初は子犬の雰囲気だったが成長期で身体は大きくなり熊さんみたいな。筋肉質で大柄。

正義の戦隊のレッド。過去に魔法少女Hに救われた。魔法少女Hの熱狂的なファン。好きすぎて祖父の権力を使い戦闘員になった。お嫁さんにしたい。日頃からHの身辺を調べている立派なストーカー。最近は発情期の熊とHからは思われている。正義のヒーローかと問われたら疑問。

一人称、オレ

「あはは！　正義は次いでです！」

お相手2:怪人毒林檎

薄紫の髪。紅い瞳。タレ目で細身な高身長のイケメン。

色々な怪人が存在するが彼の場合は触手を使って悪い人間を調教し良い存在にしようとしているらしい。勝負下着は毒林檎マークで決める。処女厨。清廉潔白をモチーフにしているくせに汚れている正義など認めない！　と、なっていた時、魔法少女Hが処女と知り奪う。そこから自分専用のオナペットと呼ぶようになった。倫理観が捻じ曲がっている。

一人称、僕

「君の正義は気にくわないなぁ」

その他モブ

★夢風(テーマカラーで呼ばれはするけど名前で呼ばれはしない)

★触手

★拘束

★魔法少女
★戦闘員
★怪人
★♂♀のアナル（ヌコパコ）
★ストーカー
★痴漢
★尿（かけたり飲んだり）
★寝取られ、寝取り

《魔法少女Hの憂鬱》

怪人。そんな異界の生物が大陸に初めて出没したのは約、50年前の海水浴中の客達の証言だ。一人、二人だったら悪ふざけで流されてしまいそうな巨大なクラゲに似た人型の青年。そんな彼が奇妙な声で話しかけてきたという。仮装か何かの撮影か。最初、客達は、そう思ったらしい。会話は成り立たないが青年は穏やかな様子で客達に話しかけ語源の違いだけなら特に問題はなかった。問題になったのは酒を飲み騒いでいた若者達が青年に絡んだ時からだった。

若者達は青年の仮装らしき柔らかい部分を引っ張ったり踏んだり酒をかけたりと酷い有様で他の客が見かねて止めに入れば、そんな客を蹴り飛ばす。それを見たクラゲ青年は酔っている若者を触手で、ぺちりと叩く。それ自体は軽いたしなめだったのだろう。しかし若者達は水を得た魚の様に声を荒げ喚き怒った。そして持っていた強い酒をかけライターで火を点けるという悪質な事をした。触手の一部が燃え転げながらクラゲ青年は悲痛な声を上げた。それは誰が聴いても悲しみを含んだもので他の客達が慌てて砂をかけたり持っていた水分

をかけたりし見えていた肌の部分は焼けなかったが。

しかし。

どろりと溶けた触手はイカが焼けた時の臭いに近く白い。脱がそうとした者もいたが何か違うと、その時に気づいたらしい。周りが青い顔になる中、クラゲ青年は、丸い球体の下から液体を、とろりとろりと流し顔らしき部分を若者達に向ける。

ゲラゲラと笑う若者達に焼けていない触手を向けるクラゲ青年。触手で太陽の日に影が出来たかと思った瞬間、腕に何か痛みを感じる若者達。見てみれば手の平が、それぞれグローブの如く赤く膨れ上がり彼らは悲鳴を上げ。クラゲ青年は、そんな彼らよりは小さな声で悲しみの声を出しながら海へと、とぼとぼ戻って行ったのだった。

その後、若者達の手の症状はクラゲ毒に刺された時と同じものだと判明する。

十日程、痛みと熱に苦しんだ後、治るが怪人達との因縁は、ここから始まった。
若者達だけの被害が新聞に大々的に掲載され《怪人は悪》と人々に印象付けられる。そうなると穏やかな気質の者と出会おうとも先入観から怪人達は忌み嫌われた。数年もすると各所で小競合いの報告が増え。今では、ほぼ、お互いに敵同士となり各国の軍は見つけ次第、彼らを抹殺しようと狙ってくる。
だが怪人達の能力は基本、人間の持っていない特殊なモノであり返り討ちにされる事が多かった。そんな中、一定の報告が上がる。どうやら彼らは女、子供に対しては手加減をするというものだった。軍とは死闘を繰り広げるが女子供が相手になると命までは奪わないとの報告結果に、とある国は一つの実験として魔法少女という存在を作り出した。
それは昔からある創作物のキャラを真似した存在で、国が関わっている事を内密に魔法少女独自のものとして出す。そうして生まれた彼女らの活躍は素晴らしいもので怪人達は魔法少女と対面すると大抵、諦めて帰って行くという行

動をとる。それに味をしめた国は更なる進化を遂げようと研究を重ねるが途中から民間の娯楽という志向が高まり、あまり支持率が高くなっても面倒だという事で彼女らを切り捨て他の少女軍隊へ方向を切り替えた。予算を打ち切られた魔法少女用の小施設は生き残る為に民間の投資家を募り。そして現在では娯楽の先の正義の象徴として彼らは個で存在するようになったのだった。

*

まだ近い仲間がいて給金以外が大切で正義をしていた頃。触手を扱う怪人が現れた。その怪人曰く本人の中の美学があるそうで悪ガキを調教し立派な人間にする事が楽しみらしい。それを邪魔しに来た私は悪い人間との事で同じく調

教されてしまう。

「ぁっ♡　な、なに、これぇ……っ♡」

古びた空き工場。長い間、使われていないであろう穴あき天井からは日が射し込み私達に光と影の深みを落とす。

「……ぁひ♡」

ベトベトな触手の液体に包まれて身体中を撫でまわされ気持ち悪い筈なのに人生で初めての気持ち良さを味わい何が何だか分からなくなった。目の前では服がズラされ、ほぼ全裸にされた少年が身を朱く染めて泣きながら尻穴を親指ぐらいの太さの触手に攻められ私を縋り見ている。私はコスチュームは着ていたが内側に入り込んだ触手が身を敏感にして何かが来そうで意識が漫ろとなっていた。

多分、話だけは聴いた事のある性的な事柄なのだと思い罪の意識と、もっと先を知ったら、どうなるのかという好奇心から少年を助ける精神が曖昧になっ

ていく。
ぴっちりと肌に合わさっている衣装の下で動く触手は服に内側から、ポコポコとした跡を残し乳房を撫でり乳首を擽って気づけば両側を執拗に刺激する。
「……ぁ♡　ん♡」
触手の数は多い。背中の筋を撫でるモノは液体を広げながら上下と何度も行きかい後ろの割れ目の間に液体を埋めていく。スカート下の太股を撫でていた触手は左右から細い先っぽを伸ばすと割れ目を、ぴろりと広げられショーツが食い込む。
「やう♡」
「どうした魔法少女H。チビと見つめ合って……なんだろう？　アイコンタクトで何か狙っているの？　君らは何かと小癪な事をするからなぁ……」
「ひぅっ♡　ち、ちがっ♡　ぁんっ♡」
食い込んだショーツの上から他の触手が、すりすり、ぺちぺちと敏感な場所

を刺激する。
「んんっ、見てよ魔法少女H。この悪ガキさぁ、お前を見て勃起したよ」
「ぼ、っき？」
当時、勃起という言葉を知らなかった私は戸惑いながら肌を朱くした少年に視線を向けた。
「え……知らないのか……ちんちんが立ち上がって、お前の中に入る準備が出来たという事……」
「へぁ♡　お、ちん、ち♡　はいる、の？」
「……んっ、いや、入れさせたら、ご褒美になるから……」
眺めて愉悦を味わっていた怪人が、ごくりと喉を鳴らして私に指先を伸ばし、そっと顎を撫でる。
「うぁあんっ♡」
ビクビクと身が跳ねて身の内側から何か噴出した感覚があった。それは不思

議な程、身体中に流れ日頃の嫌な事がスッキリする感覚だった。
「へぁ……♡　ぁっ♡」
「……むむ」
怪人は、その指先を下に滑らせ私の膨らんだ乳房の先っぽを軽く押す。
「ふぁ♡」
「……敏感すぎない？　ねぇ、H、自慰は毎日してるの？」
「ん……じぃ……？」
「オナニー……一人エッチ……この、乳首や、このまたの……うわぁ……すごい濡れよう……触手の液体じゃないじゃん、これ……」
私が甘い感覚に涎を垂らし震える中、怪人がショーツに手を触れさせて、ぎょっとした表情をして私を見つめた。
「は……んん！　お前らは純粋無垢をうたって、どいつもこいつも汚れててさ嫌いなんだよね僕」

「い、けな、いぅ♡　おころがあっても……み、みんにゃ♡　よ、ひこだも、んぁ♡」

「ふんっ！　良い子と言いながら、どうせ処女じゃないんだろモテるからって遊び惚けて……ん⁉」

疑い深い紅いタレ目をカッと見開く怪人。

「……処女じゃないか！」

私のショーツを爪で切り裂いた怪人は股の間に顔を入れて、そう叫んだ。喋る息や鼻息が当たって変な感じがする。

「……美しい」

何を思ったのだろうか。しゃがみ込み怪人は暫し、そこを見つめたかと思うと長い舌を出して舐めだした。

「ひゃんっ♡」

ぺちゅ、ぺちゅ、ちゅるちゅる。

「……や、やら♡　しょんぁ♡」

「はぁ……♡　はぁ……♡　何という事なんだ……紛れもない純粋処女……っ♡」

舌を私の中に入れていく怪人。怪人の舌は妙に長く頭が混乱する。

「ぁひ♡　ふぅ♡　うぁ♡」

ぬぽんっ♡

「くはっ♡　こ、ここに僕のペニスをっ♡　んっ」

怪人が興奮してそう呟いた時、何時の間にか裸体の中で靴だけ残っていた少年が、足で器用に、その靴を怪人に飛ばし怪人の頭にヒットした。

「くっ、くそっ！　そんなのっお前の美学？　馬鹿じゃねえの⁉　美しい行為じゃねーだろっ！　この悪っ！　嘘吐き野郎っ！」
ハッとして少年を見れば身を真っ朱にして怒っている。
「ふんっ！　行為を見て勃起している、お前が何を言おうと滑稽だぞ！」
「う、うるせえ！　無理やりじゃねーか！　ばーか！　ばーか！」
「クソガキめ……」
怪人が何かしようとしている。私は慌てて叫んだ。
「や！　やめてっ！　私に何したって良いから、その子は解放してあげて！」
「んむっ」
怪人は上げようとしていた手を下ろし私に振り向くと、うんうんと頷いた。
「……これは魔法少女Hの意思だな」
「脅してんだろ！」
「全く……お前には情緒というものが無いのか。慈悲深い魔法少女Hに感謝し

ろよ」
「人の尻穴に気持ち悪いもん、ぶっ込んでる奴が何言ってんだ！」
「この触手は僕の可愛い子達だ。失礼な……というか何だ。先程まで、ぴーぴー泣いていたくせに魔法少女が来て強気になったのか？　状況は変わってないのにさ……」
「うるせえな！　女と二人っきりの時以外で、女の前では泣くなって、じーちゃんが言ってたんだ！」
「……ふっ。それなら仕方ないな」
やれやれとした風に怪人は肩をすくめると私に視線を戻し太い触手に腰を下ろして脚を軽く開いた。
「よし、ペニスを舐めて僕の精液を飲むんだ」
「ぺにすを舐めて？　せいえきを飲む……」
「ばっ！　この悪っ！　クソ野郎っ！」

少年が叫ぶが怪人は無視をして、じっと私を見る。
「……僕の、ちんちんを舐めて白い液体を飲むんだ」
「……おちんちん」
言い直してくれたので意味が分かり触手で身体が拘束されている私は顔を近付けた。
「ふは……ん♡　そうだ……良いね。口でジッパーを下げて……」
鼻や口を使いズボンのジッパー部分の重なりを開き何とか歯で金具を噛む。鉄臭い。
「……ん、良いぞ♡」
ジジジ……ジジジ……
ジッパーを隅まで下げると生温かい何か香ばしい匂いのする赤い下着が出て

きた。
「林檎……」
よく見ると黒ボクサーパンツの真ん中に大きな林檎の絵が描いてある。
「……僕のコードネームは毒林檎だからなっ、知識のっはっ♡　そう、そこに……っ、あっ♡」
膨らんでいる布部分を軽く歯で甘噛みしてずらすと、おちんちん、ペニスが私の顔に、ぺちんっと勢い良く当たった。
「はぁ♡　そらっ早くっ♡　焦らすんじゃないっ♡」
ぶるんっぶるんっとペニスが揺れて私の頬に何度も当たる。口を開けて舌を出し舐めてみる。しょっぱい。
「ふふん……拙いな……っ、もっと舌の面積を使うんだっ♡　はり付けてっんくっ♡　ふはっ♡　そう今のは良いぞっ♡」
怪人毒林檎の言う通り舐めたり吸ったり顔を動かしていく内に何処に触れれ

ば嬉しそうかが声色やペニスの反応で分かり暫くすると口の中いっぱいに熱い液体が広がった。
「んくぅぅ♡　ぁ……ちゃんと飲めよ……♡　うっ♡　ううっ♡」
怪人の腰が浮き彼の両手は私の頭部を掴み内側に何度か液体を吐き出す。私は吐きそうになりながらも必死に喉を鳴らして独特な味の、それを飲み込んだ。
「……はぁ♡　……はぁ♡　上手いじゃないか……♡」
怪人が手を離すので私は漸く大きく息を吸い咳き込んだ。
「けふっ！　けふっ！　まず……っ」
「むっ？　不味い？　僕のが不味いという意味か」
「へ？　……うん」
素直に肯定すれば怪人は難しそうに腕を組み首を傾げた。
「そうだな……人の雌は甘い物が好きだからな……うむ……うむ……」
「あ、あのっ、これで、その子を解放……」

「ん？　まだ前菜だよね。ほらアイツも、勃起してペニスを震わせている」
触手が方向転換するので横側の少年を見れば、ペニスが腹に貼りつき透明な液体を、ドロドロ溢し、ぴくぴく震えていた。少年と目が合えば彼は少し気まずそうに目を逸らす。
「くくく！　この悪ガキに見せつけてやる！」
目を逸らしたのが何かに触れたのか怪人は嬉し気にそう言い。触手に持ち上げられた私は脚を大きく広げて少年に股の間を突き出す形になった。少年の逸らしていた目が、そろりと前に戻る。
「どうだ？　この綺麗に閉じている処女の膣が今から僕の形になるのは悔しいだろ？」
「……」
少年は目をギラギラとさせて怪人によって左右から割れ目を開かれた恥ずかし部分をガン見し息を荒くした。

「……こ、こに、それが？」
怪人のペニスを一瞥し再度、恥ずかしい部分を潤んだ瞳で見つめ喉を鳴らす少年。
「……こんなんムリだろ」

ずぷぷぷんっ！

「ひぅぅぅ……」
痛みで喉が詰まる。
「ぁあ……♡　処女膜を僕ので、ミチミチと開く感触……♡　ん……♡　このまま奥まで……♡　ふん……よしっ♡」
「い、いぁ……っ」
後ろから身体を密着させて触手に拘束されている私の腹を撫でながら怪人は

耳元に囁く。

「はぁー……♡　僕の形の……僕専用の膣になったね♡　くくく♡」

痛さで意識が朦朧とする。敵と戦っている時の痛さは色々あったが、この内側を引き裂かれる鈍く重い痛さは、じわじわとやってきて冷汗が止まらない。

「……ち、血が出てるよ」

少年が、か細い声で呟き。その声に何とか視線を向ければ朱い身で瞳を潤ませ、うっとりと私を見ているような気がした。少年の、お尻には親指程の触手が三本入り込み交互に身を動かしている。

「……く、ぅ、ぁ♡」

少年から甘い声が聴こえ身の内側から何かいけない感覚が沸き上がった。

「む……っ♡　こら♡　締めるんじゃない♡　我慢できなくなるだろ♡」

後ろから私の乳房を両手で揉み首元を舐めていた怪人が耳に舌を伸ばし舐めながら、そう囁く。怪人が軽く揺れると落ち着きだしていた鈍痛が思い出され

る。

「う……うごくと、ぃ、いたい……」

「は……♡　うんうん♡　そうだね♡　処女喪失したばかりだから……♡　くくく……♡　大丈夫だぞ♡　僕の形を身体が覚えるまで違う場所を先に解してやるからね♡　僕は僕のには優しい質なんだ♡」

怪人毒林檎は優し気な声色で呟いて私の乳首を両側から、きゅっと引っ張った。胸元が仰け反る。

「やぁ……♡」

「魔法少女Hの、おっぱいは大きいな♡　くくく……愛らしい容姿を持ちながら豊満な乳房を持ち処女で善良な心の持ち主とは……良いな、まさに理想的な魔法少女じゃないか♡　まぁ……処女は僕のモノだけどっ♡」

「ひぅ♡　ぁ、やぁ♡　いじらないで……っ♡」

両側の乳首を捏ねられたり指先で、ぴんと弾かれたりと刺激され、お腹の奥

側が、ずくずくと疼く。
「はぁ……柔らかい……スケベな事が好きな雌の乳房は特に柔らかいと聞いたが……そうなのか？　ねぇ？　魔法少女H……♡」
「ふぁ……♡　し、しらにゃ、くひっ♡」
「ん♡　そんなに揺れるな魔法少女H♡　お前の中の僕のペニスを、かき回したくなるだろ♡」
指を食い込ませながら乳房を揉まれ乳首を弄られ続けると身が自然と揺れてしまい。内側の鈍痛も治まっていく。徐々に徐々に怪人と私との違和感が消え一つになっていくような不思議な感覚がした。
「はぁ……はぁ……♡」
目の前の初々しい少年は触手に身を縛られたまま私と怪人の卑猥な交わりを、じっと仰ぎ見ている。怪人によって名称を覚えさせられた少年の勃起ペニスは腹部に張り付いて薄く濁った汁をボタボタと零しており涎のようだ。

「ほぅら♡　お待ちかねのクリ弄りをしてあげる♡」
「へぁ♡　ぁ、あ♡　まぅ♡　そへ、ぁめ♡」
怪人毒林檎が優しい指使いで私の敏感なクリと呼ばれた場所を撫で回す。
「皮をむいた桃色のクリちゃんが朱く充血していく美しさよ♡　くく……良いな……♡　興奮する♡」
「ひんっ♡　ぁ、やぁ……おっき……♡」
一体化していた怪人のペニスが急に大きさを増し身体が震える。痛みはないが圧迫感に息が詰まった。
「ぁあ♡　可愛いな♡」
「ひぁ♡　ぁ♡　ふぁん♡」
怪人に、クリを弄られながら空いている触手が私の乳房を撫で乳首を、すりすり、くにくにしてくる。身の内側から噴き出す感覚が沸き上がり、お腹が上向いて透明な液体が、プシュー……！　っと跳ね出て目の前で四つん這いで触

手に拘束され尻を攻められている少年の顔にかかった。少年は口を開け舌を出したかと思うと、その顔に飛び散った私の液体を舐め始める。

「ん……高みの蠢きは最高だなぁ……♡　お？　ぁあ、そんなに欲しいのか、よし今の僕は機嫌が良いからな舐める事は許してやろう」

そう怪人が言えば触手が少年を軽く持ち上げて彼の顔が私のクリの目の前に、ぴたっと合わさった。

「ひゃぁ♡　ぁ、だめっ♡　そんな……ふぁっ♡」

恥ずかしい。羞恥で身を捻ろうとして内側のペニスを感じ身は止まり、それと同時に少年の舌が私の大事な部分を舐め上げた。柔らかい舌が、ぺろぺろと子犬の様に動き出したばかりの疼きに重い止めなければならない痺れを感じる。

「ぁめ♡　なめちゃ♡　ぁ、あ♡」

クリを小さな舌で、ぺろぺろ、ぺろぺろ。

「さぁ♡　そろそろ僕も限界だ……動くぞ♡」

触手に拘束された状態の私の後ろで、ゆっくりと腰を動かす怪人毒林檎。動くと急激に怪人のペニスの形を感じ戸惑い身が震える。

「ぁ、め♡　ひま、ぁ♡　らめっ♡」

嫌々と顔を左右に力なく振ったが、きいてくれるわけもなく。

ずろろろろ……♡　ずぷぷぷ……♡

ゆっくりと出たり入ったりをしていく。繰り返しの挿入をされながら乳首は触手に刺激されクリは少年に舐められ続けている。駄目だと思うのに身体は言う事をきかず高みとは少し違う自分の中の秩序を守る為の攻防戦があったが、前後の二人や、まして触手を止める術はなく。

「ぁ……ひぁ……――――♡♡♡」

我慢に我慢を重ねていた身は腰を浮かび上がらせ少年の顔に押し付ける形に

なりながら膀胱の内側から沸き上がる熱を解き放つ。口が開き顎が上向き涎を垂らしながら私は尿を少年の顔へと撒き散らした。

じゅばっ！　じょっろ……じょろろろろろ……♡

少年は軽く咽ながら顔を更にクリへと押し付け口を大きく開けて喉を鳴らす。舌を動かしながら吸い付く少年は尿を飲み込んでいく。

じゅるじゅる♡　ごくんっ♡　ごくんっ♡

あまりの気持ち良さに意識が何処かへ行きそうになったが忘れるなとばかりに怪人毒林檎が腰を動かし私の奥を押し上げた。

「あひ♡　ひぅ♡　うっ♡　う♡」

「ぁあ……♡　はっ♡　はっ♡　はっ♡　くく……僕に、ぴったりの魔法少女H♡　ほら舌を出して……♡」

怪人が長い舌を伸ばし私の短い舌を巻きとって、じゅにゅ、じゅにゅと擦り合わさる。舌が気持ち良い。変な感じだ。

「ぁ……♡　ぁひ♡　んぁ♡」

ずちゅ♡　ずちゅ♡　ずちゅ♡

怪人毒林檎の腰の動きが段々と早まっていき最初の鈍痛は今では全く感じず。その先にある不思議な感覚が徐々に私の内側から沸き上がっていく。少年の舌使いも止まらず。

「もぁ♡　まら♡　まぁ、きちゃ♡　う♡」

「僕も、僕も出すよ♡　っはぁ♡　ぁあは♡」

私の全身の震えと共に怪人の腰も震え。何か熱い液体が内側を叩き怪人毒林檎は気持ち良さそうな声を上げて私を後ろから抱きしめたのだった。

一人目メインヒロイン:凛子(りんこ)♀
両親は早くに先立たれ遺産を奪った身内の元で虐げられ友達もいない子。唯一、好きな宇宙への憧れを果たす為、遺産を許可なく引き出し修学旅行へ来たがレイプ未遂され絶望の中、宇宙事故で救命ポッドに乗って脱出。その間、サポートＡＩのニシと友になり落ちた惑星でカメの保護を受ける。

一人目メインヒーロー:カメ♂
母星を管理する研究者達のクローン。管理者。孤独から徐々に精神が崩れ欠けている最中、凛子達が落ちてきて執着していくがピュアデレ。

サブキャラ:ニシ(サポートAI)
凛子によって自我が芽生えたＡＩ。カメの提案により新たなクローンの中へ入る事になる。

二人目サブヒロイン:カシア♀
ヨシアの父親違いの姉。弟の為に生きている感がある。弟を溺愛している。

二人目サブヒーロー:ヨシア♂
カシアの父親違いの弟。クズ父に虐待され幼い頃に肌の病気になり姉に過保護気味に育てられ姉を愛している。

モブ1:事故前に凛子をレイプしようとした学生達〜

モブ2:ポチャ。陰キャの元、イジメられっこ

モブ3:タケルと二人の彼女。陽キャの元、イジメっ子

モブ4:シェフ。礼儀正しい子が好ましい、お爺さん

モブ5:謎の少年

モブ5:船員や死刑囚の男達やクローンなど

★カニバ要素やG+あり(ガッツリ食べる)
★生理ネタあり
★モブ姦あり
★ピュアデレ、ヤンデレ
★近親相姦(父親違いの姉弟)
★放尿(飲む)

★睡眠姦
★触手要素あり
★バトル(ガチ目)
★なんちゃってＳＦ映画風味
★純愛
★イチャラブ
★妊娠
★ハート喘ぎ

《漂流宇宙亀情事》

宇宙のデブリが弾丸の如くぶつかって船は呆気なく腹に穴を空けた。フシュフシュと溢れる息は、まるで酸素を求める泳ぎが下手な魚で暗い暗い海を馬鹿みたいに踊り狂う。必死に駆け込んだポッドの中で彼等は祈りを見せたが運の無いままに子供達は先の見えない排水口に飲まれてしまったのだ……――

＊＊＊

カチカチ、カチカチ。

何かの機械音。酷い頭痛、目眩、吐き気をその音は刺激する。汗でへばりついた髪の間から彼女は瞼を緩く動かした。しかし開きたくとも寝ている途中のような重さが上手くいかない。どうやら金縛りだと思い呼吸だけが、フッフッ

と緊張感を持って身の内に響いた。

金縛りは嫌いだと凛子は思う。小さな頃から独りで寝るのが嫌で仕方がなかった。独りとは無情だ。独りは寂しい。救いを求めたくとも震えようとも助からない不安だけが重くのしかかってくる。

そんな時、見透かしたように浮かぶのだ。

頭の中に誰か知らない知りたくない何かが。暗い暗い中で浮かぶモノは何なのか何なのか人の形のようで違うそれに震え上がり逃げたい一心で身体をもがくが全くもって言うことを聞いてくれない身は、その何かに何時も負けてしまう。

ギシッ。ミシッ。

汗、熱い、息、苦しい。息が上がり迫り上がる涙が歯の震えを増長させる。

カチカチ。ギシッ。ギシリ。

凛子はハッとした。音が。暗闇以外から音がしている。ヒューヒューっと凛子の喉は声を出せず擦れた息を出し生物的な臭いが自身を包み込んだ。

バキキキッ！

酷い音だ。凛子は骨が粉々にされたのだと思った。そんな既視感を感じる程に大きく全身に響く音に凛子は堪らず嘔吐した。口から鼻から目から下からも液体を垂れ流したからだろうか。

凛子は漸く瞼が上へ動くのを感じた。ぶるぶる、ぶるぶると震えながら暗闇ではない明るい空間が入り込む。白い。急な光は凛子に何も見せず眩しい痛み

が眼孔を刺激した。
その痛みに凛子は酸っぱい口から、ホッと息を吐いた。
生きている痛みだ。
「生きてる……？」
何時も得体の知れない恐怖は命を抉ってくる。しかし今日は不思議な事に凛子を心配しているような声色が聞こえた。凛子は何度か開閉を繰り返した目を恐る恐る眩しい方へと向けた。

チカチカ。チカチカ。

何か丸いシルエットが見える。酷く明るい光に照らされたシルエット。何だろうか。
「生きている……っ！」

それは切羽詰まったような、しかし歓喜に満ちたような声色で骨を軋ます音を立てながら凛子に近付いてくる。

バキッ。ガシャン。ガチチチッ。バキンッ。

酷い音でも、シルエットが視界に入ってから凛子の震えは止まっていた。どうも、善といったものをシルエットから感じるからだろう。

「どっか痛い？　何か飲む？　ここから動かしても大丈夫そう？　どこか圧迫はされて……ないね！　あ～！　すぐ出そう」

ポンポンと喋る声を聞きながら、はっきりとしていくシルエット。凛子は漸く目に見えた、その姿に瞼を、また繰り返しぱちぱちとさせた。

眼前には亀がいた。否。大きな亀の甲羅を背負った男がいた。

「奇跡だ」

亀は凛子をベットのような所に寝かせて傷の手当てをしている。
「救命ポッドが何台も落ちてはきてたけど生命反応があったのは君のポッドだけなんだよ」
凛子は、その言葉に何かを思い出そうと、きょろりと目を動かす。
「多分、順番と角度も幸いしたんだろうね何台前かは完全に溶けているし」
「団子の状態で君の前のポッドがクッションになって……でも後ろのポッドは酷いものでね。ああ……君のポッドも正直、生命反応が出た時は驚いたんだけどさ」
うんうんっと頷く亀に凛子は漸く自分達の修学旅行の船がデブリで操縦が効かなくなり宇宙空間の渦に飲み込まれたのを思いだしたのだった。
「……に」
「水かな？」
亀は凛子の背を腕で支えながら持ち上げると水の入ったお椀を傾けた。凛子

の口端から液体がこぼれ落ちる。舌に触れた水は酷く甘く感じた。
「ああ……上手く飲めないんだね……点滴はするとしても……」
亀が少し困った表情をする。
「……に、ニシ……は……」
凛子は一つ一つ声を出していく。
「……君が休んでいる間に、もう一度探してみよう」
そう亀の彼は優しく呟いて凛子の頬を撫でると水が入った、お椀を口にあおり彼女の唇を塞ぎ液体を、注ぎ込んだ。凛子は目を白黒させて困惑を見せたが抵抗する気力は無く、それよりも、ゆっくりと入り込んでくる甘い水が美味しくて、ごくごくと喉を鳴らしたのだった。

＊＊＊

修学旅行の許可は勝手に埃をかぶった親戚の通信機から出した。学園が好きかと言われたら特には好きでは無い。だが修学旅行先で見れるであろう宇宙の美しさを人生で一度ぐらい経験してみたい。そう思ったのだ。学園を卒業すれば親戚は私を家から追い出す。死んだ両親の遺産は彼らが持ったまま。学園の高い修学旅行代を出したがらないであろう事は予想出来たが、そこも遺産ＩＤから勝手に支払うように弄っておいた。帰ってきた時にはバレて、また殴られるだろうが私は今を楽しみたい。約、十日間の宇宙旅行。これが終わった後なら死んだってかまやしない。

「なあ凛子」

「……？」

椅子に座り窓から宇宙を眺めていれば、よく知らない男子生徒に名前で話しかけられた。学園は単位制であり必須科目を除けば比較的自由に授業は選べる。

そして交流関係は、そこに順次し目の前の彼らとは特に交流は無かったと思われた。
「一人なの」
「今日も付けなきゃだろぉ？」
「ほんとの事、言っちゃ可哀想じゃんか～」
「ぷはっ」
小さな笑い声が目の前の男子生徒達から流れ嫌な雰囲気を感じる。私は椅子から立ち上がり、その場を去ろうとしたが初めに声をかけてきた男子生徒が前を塞いだ。
「ちょっとー駄目だろー話、途中で席を立つとか礼儀がなってないねえ」
「まあ親無しだし仕方ないんじゃね？」
「つーか。お前、旅行来れる金あったのな」
「あー……それ。オレも思ったー」

「凛子さあ……」
「気安く名前を呼ばないで」
「……あ？」
先程から苗字ならまだしも下の名前を逐一呼んできて、その度に背中に悪寒が走った。やめてほしい。気分が悪くなる。折角、宇宙の景色を楽しんで気分が良かったというのに最悪だ。
「え？　生意気じゃね？」
「まあ身体売るような女だしな碌な教育受けてねえんだろう」
「あ～なるほど」
「ぶっ」
また笑い声。それにしても急に何なのだ。いちゃもんの付け方が悪質すぎる。
「頭おかしいんじゃないの」
「おわ強気」

「頭がおかしいのは、お前～」
「学力も大した事ないしな」
「確か下から数えた方が早かったよなー？」
まともな資料データーを買う資金を一銭も貰ってない為、学園の紙の書庫が存在する図書館で勉強をしていたが資料探しに時間がかかり過ぎる為、結果的に私の学力は低いものとなっている。取られた親の遺産から資金調達をしたのは今回が初めてだ。もしも前もってやっていたら今回の宇宙旅行には来る事が叶わなかっただろう。
「はあ……貴方達が、そんなに私に興味があっても私は興味がないけどね」
「「……」」
男子生徒達は嫌そうな顔や真顔になって私を見る。内心、恐怖があったが不愉快さでの怒りの方が気持ちが勝っていた。
「あぁ！　めんどくせっ」

「きゃっ」
「うわ、可愛い声出すじゃん」
「な、なに……っ、んぐっ」
「わざわざさーこんな人気の無い所で、男待ちしてんだから好きだよなあ」
「やめっ、ぐっ」
数人に床面に押し倒され下のカーペットに身が沈む。
「お前、見た目は最高なんだよな」
「どうせ股開いて金稼いだんだろ？　良いじゃねえか暇つぶしにさあ」
「気持ちい事して仲良くなろうよ～」
「って、うわ、こいつ……」
「あ～女の日か」
「へ～変なニオイすんのなあ……」
「げー汚れるじゃねえか」

私を押さえつけている彼らは宇宙用のスーツを無理やり開けて中を見て、それぞれが勝手な言葉を吐き出した。私は、もがいたが力では敵わず声を出したくとも口元を押さえられた上に恐怖から上手く喉が動かない。音にしようともカスカスと空気が漏れるのだ。

「どうする？　って……お前、まじか」

「ひ、ぅぐ……」

股の間に生温かな刺激を感じ震えた。

「ん……いやさ～彼女の舐めたいって、この前言ったら断られたんだよね～」

「はあ？　気持ち悪りい奴だな……」

「……まあ匂いは結構、なんか美味そうな感じだよな」

「そう、なんか、そうなんだよね」

「いやいや……」

「うわ、すげー舐めるじゃん……」

完全に宇宙用のスーツは脱がされ脚を開かされた中に顔を突っ込んだ一人は私の股の間を、べちゃべちゃと音を鳴らし舐めていた。
「おっぱいデカいよなあ。おわ、やわらけ……」
「え、アイツのと全然違う……どうなってんのこれ」
無遠慮に左右の男子生徒が私の胸を掴み揉み痛い。けれども股の間を舐める舌使いは嫌なのに初めて感じる甘い刺激で腰が浮いていく。
「お、感じてんじゃん♡」
「ん……♡　これで合意だね♡」
私の股の間を舐めながら生徒は指を一本入れていき動きを止めた。
「あれ、これ処女だわ」
「は？　まじ？　身体売らずして、こいつが、どうやって乗るわけ」
その言葉に動揺したのか男子生徒の口を塞いでいた手の力が緩む。
「……死んだ両親の遺産でよ！　もう、ほっといてよ！　私だって宇宙をんっ、

ぁ、な、と、とめ」
指を一本入れたまま、生徒は舌の動きを止めず刺激し続け私は一人で、こっそりとストレス発散でしていた時とは違う感覚を味わい身が跳ねた。
「う、ぅ……ぁっ」
視界がチカチカする。何が起こったと言うのか。
「血の味だった？」
「血だけど……なんつーか悪く無い感じ？」
「うえー僕も舐めてみようかな」
「ほい」
「お前らなあ……まあ良いや、俺は綺麗な時に入れるから今回は舐めろ、ほら」
顔横に宇宙用のスーツの排泄用の場所を開けて立ち上がった男性器を出した男子生徒を睨む。
「それとも中に出された方が良いか？　ん？」

「生理中ってさ妊娠しないんだっけ？」
「さあ？　まあ薬あるし大丈夫なんじゃね？」
「ほらほら～素直になれば、それぐらい買ってあげるからさ～♡」
私の、お腹を撫でながら先程まで股の間を舐めていた生徒が笑って言い。
「っ……う、ぐ」
もう片方の生徒は反対に股の間に顔を入れて穴の中へと舌を入れ込んだ。また新しい液体の粘着質な音を聴きながら私は涙を流し震える口を開けて少し尿の臭いがする男性器を口へと含んだのだった。

＊＊＊

「良いの？　処女、オレがもらって……お前、凛子狙って……」

「はぁ？　うっせっ、べ、別に何回めだろうが同じだろ。血とかクソ汚ねえし！　つーか、そーいう事、言うなよな、マジで！」
「あはは」
「いーんじゃね？　一番のヤリチンは処女慣れしてんでしょ」
「え～快楽堕ちしちゃう感じ？　ウケる」
「いやー流石に生理中の処女に入れるとか初めてだわ。初体験♡」
宇宙用のスーツの排泄時に開ける部分を開き私の股を先程、舐めた生徒は腰を近づけていく。
「……っ」
その時、時間が妙に、ゆっくりと感じた。舐めるような視線、荒い息づかい。生温い汗が垂れ落ち体臭が鼻腔に入り込み。ひたりと触れた固いモノが私の大事な部分を滑り防備が効かない、そこへと捻じ込まれていく。

――……終わり……もう終わりなのね……

死ぬ前に人生で一度ぐらい好きな瞬間を思いっきり見飽きる程見つめ、そして死にたかった。なのに、こんな風に身勝手な押し付けで最後の希望は奪われてしまうというのか。

――……ぁあ、ぁあ……なに、それ……腹が立つ……腹が立つ……！

腹が立ってしょうがなかった。勝手な憶測と欲の発散を楽しむ彼らや、それらをどうにかする力が無い自分に酷く、酷く腹が立ち恨んだ。

――……こんな奴ら……皆、皆、アイツらもコイツらも人の希望を平気で奪う奴らなんて消えてしまえば良いのに……!!

そう怒りで頭がの中いっぱいに自分の叫びが響き渡った時だ。身が浮かんだ。私だけではなく、その場に居た全員の身が浮かんだのだ。

ズドオオオオン……

何か物語で表現されるような大砲が船を攻撃した音。そんな風に感じた。興奮で色めき立っていた彼らと共にカーペットに落ち。彼らは困惑した表情で辺りを見渡した。すぐに天井付近で非常時に流れる立体ディスプレイが映し出されデブリの事故下にあるという情報が流れた。私も天井側に視線を向けると困惑しながらも身体の生理現象が止められなかった一人が目を見開き私の口内から抜け出ていた男性器から白い液体を溢し固まっていた。

「え、まじ？　今、行く。何番のに乗る？　それにオレも乗るし」

先程、私の中にモノを入れようとしていた男子生徒は耳の装飾型になっている通信機で誰かと話しながら身を手早く整え動き出す。それを見て他の面々も我先にへと立ち上がった。
「なに？　まじで緊急なわけ」
「とりあえず全員、救命ポッドに乗れってさ」
「たくっ、これからって時に……」
「つーか出してんじゃん」
「うるせっ」
面々は軽口を叩きながら身を直し私にしていた事柄など、どうでもよくなった雰囲気で、その場を去っていく。私は繰り返される緊急放送の中、裸体でカーペットに寝転がっており、ぼんやりと天井を眺め軽い笑い声が喉から零れたのだった。
「……ぁは」

*

「人の月経の仕組みは、こちらの過去の周期より六倍速いね」
「みたいですね……」
『リン断る事も可能だ』
「でも、その場合、クローンが欲しいと思う」
「クローン……」
『この星は女性個体の数が減少し滅びかけている』
「もう滅んでいると変わらないと思うけどね……」
カメが軽く口端を上げて、そう呟いた瞳は、どこか物憂げな印象で凛子は瞳を、キョロリと動かした。今、凛子達が居るのは巨大な泉の縁で彼女は初めて

見る視線での透き通った水に感嘆しつつ考える。この星の現状は美しく見えるがカメは過去の研究者のクローンであり今は管理者として過ごしている年月を考え物悲しく感じた。カメが同情を計算に入れていたわけでは無いが結果的に、それは凛子の意思を固める事となった。

「その月々の、現在の卵子を先ずは研究材料として差し出せば良いんですよね？」

「！　うん！　そうしてくれると、とてもありがたいよ」

『リン無理はしなくて良いんだ』

救命ポッド内で過ごした時間でニシとは、まるで兄妹のように打ち解けて再度、声が凛子に聴こえるようになってからは少々、過保護気味だ。ニシの意識は丸い銀光する球体の中に入り空中に、フヨフヨと浮かんでは凛子の側にいる。

「……ちなみになのですが」

「うん」

「それは、どうやって渡せば良いんでしょうか……？」

あの時から随分と回復した凛子は色々と吹っ切れたのか感謝の念が強いのか自分に出来る事はないか随分と積極的に意思を見せた。その結果、一番欲しい現状の願いをカメは話し凛子は承諾する事となったのだ。

清めた身体に薄着をはおり台座の上で眠りについた凛子を眺めるカメは自分の身体に急激に起こった変化に戸惑いの表情を浮かべていた。カメは薄着の前を開いた凛子の白い裸体を見て自分の身体が震え汗が滲み鼓動がおかしくなった為、一度、検査をし興奮状態にあるが身体は非常に良好と出た。

「興奮……僕は興奮しているのか……」

『カメ、自慰の経験は？』

「え……自慰……ああ……知識として……皮を剥く作業はしたけど……あれは自慰なのかな」

『精子は出たのか』

「精子は……自然に出るものだから……」

『自然に出るのか』
「眠りから起きた時は基本……あー……でも皮むきの時に、ちょっと滲んだ事はあるかなあ」
『受精の仕方は卵子との結合か』
「うん。そこは同じだね。記憶によると半年に十日程の妊娠期間があるから完全に受精するまで交代で女性体と行為していたらしい。ただ女性体がクローンになってからは同じく卵子を摂取し培養液内で育て一定の時期が来たら外で成長する為に出るのは多分、僕らと同じかな……一年程は知識を吸収し出てからは歩行を覚え自動化はされているけれど管理を行い……」
『幼体が管理者となるのは酷ではないか』
「うーん。前は前任者が共にだったけれど改善されてからは、そうでもないよ。計算の元、出るまでに筋肉の作りも強いものになっているから精子だって出てから半年で摂取できるようになるんだよ。成長も昔より早いし」

『成人までの年数は？』
「多分、出てから三年ぐらいかな」
『その個体の平均生命活動の年数は？』
「平均は九十年ぐらいじゃないかな最長で百八十三年」
『最短は？』
「外に出て直ぐ終わるのも数多くいるから……僕らは学んでいるんだ」
そこまで、ニシと会話を進めるとカメは自分の前を寛げて服の中で窮屈そうにしていた性器を徐に取り出した。
「……」
『……』
急に検査室内は静かになり、カメは恐る恐る口を開き呟く。
「……皮の上下はするが、こんな風になったのは初めてだ」
『……ニシには分からない変化だが情報では、そうなった場合、静めるか自慰

をして気分を向上させるのが基本のようだ』

「自慰……」

カメは凛子を、じっと見つめると徐に自分の男性器を握りしめた。

「……なんか出来そうな気がする」

『自慰か』

「うん」

カメは清潔を保つ時に知る普段の皮下ろしをして内側の桃色の面を出し皮を動かしながら竿の部分を強めに上下させる。吐息だけ溢し無言で、それを繰り返していると先っぽから透明な液体が滲み垂れるが気にせず、そのまま一緒に動かしていれば、その液体を含むと滑りが出ると気づき、どんどん出てくるそれを手の平の内側に拾いながら繰り返し繰り返し肉棒を刺激した。

――……錆に油を刺すみたいな……？　何これ……変な感じ……♡

にち、にちにち、ぬち……

検査室内で響く粘ついた液体が摩擦で弾かれ妙に耳奥に響く。

「……っぅ、ぁ……ぁ、あ♡　ううっ♡」

身体に膨れ上がった感覚に一瞬手を止めそうになったが続けたい欲求がカメの中で勝り次の瞬間、白い液体が、どりゅどりゅと肉棒の先っぽで、ゆったりと滲み出る。

「ふー……ふー……♡」

カメの視点は凛子を見つめながら定まらず口からは涎が垂れガクガクと腰が震え白い液体が、ボタボタと床面へ垂れ落ちていった。カメは荒く呼吸をして呆然と垂れ落ちた白い液体を見つめる。少しするとハッとして検査用の筒の中へと肉棒に残っている所から落とし入れ性器部分を拭くと床に垂れた液体も黙々

と拭いたのだった。

＊＊＊

「……今日も良いかな？」

最近カメは私に排卵検査を頻繁に頼んでくるようになった。

『そんなに必要なのか？』

「……うん」

燃えていない救命ポッドから持ってきた布でニシの指導の元、予備の服類を作っていた手を止めて二人の会話を聴く。私としては殆どの生活をカメにお世話になっているし長年の悲願という思いに対して熱心になるのは特に問題はない。

「ここまで縫い終わったらで良いですか？」
「もちろん」
「ただ、遅れ気味だった月経が、もう少ししたら来ると思うんですよね。その場合も調べるんですか？」
「……うん。調べたいかな。仕組みの違いとか基準を作りたいし元々、存在した僕らの女性体は半年に一度だったから、その違いや変化も……」
「半年に一度、羨ましいなあ……私も、そうなれば良いのに……」
「……？　どうして羨ましいかな？」
長椅子の隣に座ったカメは不思議そうな表情をして首を傾げた。
「あ……えーっと、その私達……いや、私個人としては、あんまり月経って好きじゃなくて……」
「好きじゃない？　それは、どうして？」
「その月に一度、来た時に身体が重くなったり……うーん、お腹や頭が痛くなっ

たり……でも休めるわけじゃなくて……それを抑える薬もありはするんですけど常に服用は出来ないですし長い間、痛いと憂鬱な気分になって……私は、そこまでじゃないですけど人によっては月経の日以外も体調悪くなりますし……休みたい時に必ず休めるわけでもなく……」

「なるほど確かに言われてみれば本来、準備期間が前段階である筈なのに月で、それを短い期間で繰り返すというのは妊娠過程としては効率が良いけれど負担を考えると、かなり……そうか……リンコ達の星の者は、そうして子孫存続の為に身体を作り替えたのか……うーん。僕らの滅びた基準から考えると効率的に聞こえるけれど女性体に負担をかける事が良しとはされない筈だから……」

「あ、あの……ただの愚痴と言いますか……気にしないでください……」

「愚痴？　僕らのように培養液内で育つ過程は、そういった負担の面からも考えられていたと思う。普段の生命活動の中で半年の周期に向けて母体は出来上がり受精が必ず成功するとは限らず作り替える際は内側で出来た面が剥がれ落

ちて苦痛を与える構造だったと記憶している。そんな時に休まさない？ リンコの星は随分と忙しい……月の周期もそうだけど効率を重視しすぎた結果、必要なものを失うのは僕らの星とは別の愚行なのでは……でも数は僕らより……ニシ、君らの母星の知識文明時間は推定いくつ」

『知識文明とは人が記録を残している辺りからか』

「そうだね過去の分岐の分は切り落として」

『壁画といった記憶も含むなら約六万年前』

「じゃあ今のように、リンコ達の宇宙旅行に出て活動するようになったのは？」

『一般の旅行となると326年、当初は危険視される行為だったが宇宙生命体との交流から今は緩和され1603年程前からは流行りとされ47年前から星内の旅行は衰退し他惑星へ向かう事が支流化したと思われる』

「随分と短いんだね。僕らの星が交流を絶ってから約二千年程だけれど……ああ、でも記憶にある不時着は……君達の計算で言えば278年前か……あれから語

源は、そこまで変わっていないけれど少し音が違うものは速さ故かな。うーん。君達の星は今、生殖の過程で衰退等は無い？　僕としては、これから滅びる可能性の懸念を感じるのだけれど……」

『母星の動きは現時点では人の衰退は緩やかな状況とされる。しかし環境が劣悪で他星との貿易で秩序を保っているが、このまま改善されなければ計算上は資源が尽きる前に略奪へ走ると予測される』

「その場合、君らの星の最終資源は人となるのでは？」

『その問題は153年前から指摘されているが改善はされていない』

「仮定の話だけれど、もしリンコとの受精が可能ならば僕らの星は女性体を欲するだろう、その星の環境が補える資源が、どこまで渡せるかは別だが、その交換は可能だろうか」

『人権の問題をクリアするならば資源としては可能と考えられる』

「なるほど。でも僕らの星は、そういった生殖繁栄に向けてだけれど他星は違

うだろう？　惑星によっては僕らを狙って家畜奴隷にし食そうとした愚か者達が……」

『現時点での認識している惑星に他星の者を奴隷化や食すという情報はないが過去、侵入した者の中には、そういった者もいたとされている』

「まあ、まだ、そういった分かりやすいのは良いけどね。君らの状況を予測して待っている可能性はあるから……僕らの星は環境を整えているけれど貿易に乗じて不燃材の捨て場にしようと持ち掛ける者はいるだろう？」

『確かに我が星でも歴史として残っている部分では……』

「あわわ……」

歴史の話や現在の問題になり戸惑う。授業だろうか。

「やっぱり、すごく気になるな……うん。月経の時も念入りに調べさせてほしい」

何も言えなくなり、ぼんやりと二人を眺めていれば笑顔でカメに、そう言わ

れた。
「は、はい……」
研究の話題になると普段の三倍ぐらいカメは話す気がする。元々、研究者のクローンという話だから、そういった知識欲求が強いんだろうと感じた。
「あ、あの縫い終わりました」
「うん？　これは下着？」
「えっ、あ、そうですね」
カメが作り終わっていた一つを見て呟き私は頷く。
「そうか。専用のも作らないとだね」
「専用？」
「月経になったら大抵は横になって剥がれ落ちる痛みに耐えるけれど、その時に常々出血するよね？」
「そ、そうですね」

「止血……いや吸水の方か……用意するから、それを」
「あ、それは一応、ポッド内に予備があったので当分は大丈夫かと」
「……？　でも今後の事も考えるなら、お試しを試してくれないかな」
「あ、は、はい！　それは、もちろん！　ありがとうございます！」
「……ふは、僕は、まだ何もしてないのに。リンコって、すぐ御礼を言ってくれるね」
「へ？　その……気持ちが嬉しいので……」
「気持ちが……そう？　なるほど、じゃあ僕も、ありがとうだ、リンコ」
カメが、そう呟いてニコニコしてくる。そう嬉しそうに言われると私の胸の内側が、ぽかぽかと温かくなった気がしたのだった。

★★★サンプルはここまで！　続きは本編で！　★★★

《2022年発行小説集・R18》サンプル約文字

発行日　2023 年 6 月 13 日

著者　いば神円（しんえん）
https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。